

一 春昼

一 泉鏡花作

一

「お爺さん、お爺さん。」

「はあ、私けえ。」

と、一言で直ぐ應じたのも、四邊が静かで他には誰も居なかつた所為であらう。然うでない、其の皺だらけな額に、顛巻を緩くしたのに、ほか／＼と春の日はさして、とろりと酔つたやうな顔色で、長閑かに鋤を使ふ様子が――あの又其の下の柔な土に、しつとりと汗ばみさうな、散りこぼれたら紅の夕陽の中に、ひら／＼と入つて行きさうな――

暖い桃の花を、燃え立つばかり揺ぶつて頻に囀つて居る鳥の音こそ、何か話をするやうに聞かうけれども、人の聲を耳にして、それが自分を呼ぶのだとは、急に心付きさうもない、恍惚とした形であつた。

此方も此方で、恁く立處に返答されると思つたら、聲を懸けるのぢやなかつたかも知れぬ。

何爲なら、扱て更めて言ふことが些と取り留めの  
ない次第なので。本来なら此の散策子が、其のぶら  
／＼歩行の手すさびに、近頃買求めた安直な杖を、  
眞直に路に立て、鎌倉の方へ倒れたら爺を呼ぼう、  
逗子の方へ寝たら黙つて置かう、とそれでも事は濟  
んだのである。

多分は聞えまい、聞えなければ、其まゝ通り過ぎ  
る分。餘許な世話だけれども、黙切も些と氣になつ  
た處。響の應ずるが如き其の、（はあ、私けえ）  
には、聊か不意を打たれた仕誼。

「あゝ、お爺さん。」  
と低い四目垣へ一足寄ると、ゆつくりと腰をのし  
て、背後へよいとこさと反るやうに伸びた。親仁と  
の間は、隔てる草も別になかった。三筋ばかり耕や  
された土が、勢込んで、むく／＼と湧き立つやうな  
快活な香を籠めて、然も寂寞とあるのみで。勿論、  
根を抜かれた、肥料になる、青々／＼と粉を吹いた  
そら豆の芽生に交つて、紫雲英もちらほら見えたけ  
れども。

鳥打とりうちに手てをかけて、

「つかんことを聞くがね、お前まへさんは何なんぢやないかい、此この、其處そこの角屋敷かどやしきの内うちの人ひとぢやないかい。

親仁おやぢはのそりと向直むきなほつて、皺しわだらけの顔かほに一杯ぱいの日當りひあた、桃ももの花はなに影かげがさした其その色いろに對たいして、打向うちむかふ其方そのほうの屋根やねの蕨いらかは、白晝はくちう青麥あをむぎを焙あぶる空そらに高たかい。

「あの家うちのかね。」

「其その二階にかいのさ。」

「いんえ、違ちがひます。」

と、云いふことは素氣そつげないが、話はなしを振切ふりきるつもりではなさうで、肩かたを一ツ揺りゆすながら、鍬くはの柄えを返かへして地つちについて此方こつちの顔かほを見みた。

「然さうかい、いや、お邪魔じやまをしたね、」

これを機しほに、分わかれようとすると、片手かたてで顛卷はちまきを拐かなぐり取とつて、

「どうしまして、邪魔じやまも何なんもござりましねえ。はい、お前まへ様さま、何なにか尋ねたづねごとさつしやるかね。彼處あそこの

家は表門さ閉つて居りませども、貸家ではねえが

「

其の手拭を、裾と一緒に、下からつまみ上げるやうに帯へ挟んで、指を腰の兩提げに突込んだ。これでは直ぐにも通れない。

「何ね、詰らん事さ。」

「はい？」

「お爺さんが彼家の人なら然う言つて行かうと思つて、別に貸家を捜してゐるわけではないのだよ。」

奥の方で少い婦人の聲がしたものの、空家でないのは分つてるが、

「然うかね、女中衆も二人ばツか居るだから、」

「其の女中衆に就いてさ。私がね、今〔彼處の横手を此の路へかゝつて來ると、溝の石垣の處を、づる／＼と這つてね、一匹居たのさ——長いのが。」

怪訝な眉を臆面なく日に這はせて、親仁、煙草入をふら／＼。

「へい、」

「餘り好物な方ぢやないからね、實は、」  
と言つて、笑ひながら、

「其の癖恐いもの見たさに立留まつて見て居ると、何ぢやないか、やがて半分ばかり垣根へ入つて、尾を水の中へばたりと落して、鎌首を、あの羽目板へ入れたらうぢやないか。羽目の中は、見た處湯殿らしい。それとも臺所かも知れないが、何しろ、内にや少い女たちの聲がするから、どんな事で吃驚しまいものでもない、と思ひます。」

あれツ切、座敷へなり、納戸へなりのたくり込めば、一も二もありやしない。それまでと云ふもんだけれど、何處か板の間にとぐろでも巻いて居る處へ、うつかり出會したら難儀だらう。

どの道餘計なことだけれど、お前さんを見かけたから、つい其處だし、彼處の内の人だつたら、一寸心づけて行かうと思つてさ。何ね、此處等ぢや、蛇なんか何でもないのであるかも知れないけれど、

「はあ、青大將かね。」

と云ひながら、大きな口をあけて、奥底もなく長閑な日の舌に染むかと笑ひかけた。

「何でもなかあねえだよ。彼處さ東京の人だからね。此間も一件もので大騒ぎをしたがす。行つて見て進ぜますべし。疾うに、はい、何處づらかつたも知んねえけれど、臺所の衆とは心安うするがすから、」

「ぢやあ、然うして上げなさい。しかし心ない邪魔をしたね。」「なあに、お前様、どうせ日は永えでがす。はあ、お静かにござらつせえまし。」

恚うして人間同士がお静かに分れた頃には、一件はソレ龍の如きもの歟、凡慮の及ぶ處でない。

散策子は踵を廻らして、それから、きり／＼はたり、きり／＼はたりと、鶏が羽うつやうな梭の音を慕ふ如く、向う側の垣根に添うて、二本の桃の下を通つて、三軒の田舎屋の前を過ぎる間に、十八九のと三十ばかりなものと、機を織る婦人の姿を二人見た。

其の少い方は、納戸の破障子を半開きにして、姉さん冠の横顔を見た時、腕白く梭を投げた。其の年取つた方は、前庭の乾いた土に筵を敷いて、背むきに機臺に腰かけたが、トンと足をあげると、ゆるくキリ／＼と鳴つたのである。

唯それだけを見て過ぎた。女今川の口繪でなければ、近頃は餘り見掛けない。可懐しい姿、些と立佇つてといふ氣もしたけれども、小兒でも居ればだに、どの家も皆野面へ出たか、人氣は此の外になかつたから、人馴れぬ女だち物恥をしよう、いや、此の男の倂では、物怖、物驚をしようも知れぬ。此の路を後へ取つて返して、今蛇に逢つたといふ、其二階屋の角を曲ると、左の方に脊の高い麥畠が、なぞへに低くなつて、一面に颯と擴がる、淺緑に美しい

白波が薄りと靡く 渚のあたり、雲もない空に歴々と眺めらるゝ、西洋館さへ、青異人、赤異人と呼んで色を鬼のやうに稱ふるくらゐ、こんな風の男は髭がなくても (帽子被り) と言ふと聞く。

尤も一方は、そんな風に ー よし、村のものゝ目からは青鬼赤鬼でも ー 蝶の飛ぶのも帆艇の帆かと思ゆるばかりけ海水浴に開けて居るが、右の方はうは昔ながらの山やまの形なり、眞黒まつくろに、大鷲おほわしの翼打襲つばきうちかさねたる趣おもむきして、左右さいうから苗代田なはしろたに取詰とりつむる峰みねの棲つま、一重へは一重毎へごとに迫せまつて次第しだいに狭せまく、奥おくの方かた暗くらく行詰ゆきつつたあたり、打ぶつけなりの茅屋かやの窓まどは、山やまが開ひらいた眼まなこに似にて、恰あたかも大おほなる墓ひきがへるの、明あけ行ゆく海うみから搔かいすくんで、谷間たにまに潜ひそむ風情ふぜいである。

されば瓦を焚く竈の、屋の棟よりも高いのがあり、  
 主の知れぬ宮もあり、無縁になつた墓地もあり、頻  
 に落ちる椿もあり、田には大な鱒もある。

あの、西南一帯の海の潮が、浮世の波に白帆を乗  
 せて、此しばらくの間に九十九折ある山の峽を、一  
 ツづゝ灣にして、奥まで迎ひに來ぬ内は、いつまで  
 も村人は、むかう向になつて、ちらほらと畑打つて  
 居るであらう。

丁どいまの曲角の二階家あたりに、屋根の七八重  
 つたのが、此の村の中心で、それから峽の方へ飛々  
 にまばらになり、海手と二三町が間、人家が途絶え  
 て、却つて折曲つた此の小路の兩側へ、又飛々に七  
 八軒續いて、それが一部落になつて居る。

梭を投げた娘の目も、山の方へ瞳が通ひ、足踏み  
 をした女房の胸にも、海の波は映らぬらしい。

通りすがりに考へつゝ、立離れた。面を壓して菜種の花。眩い日影が輝くばかり。左手の岨の緑なのも、向うの山の青いのも、偏に此の眞黄色の、僅に限あるを語るに過ぎず。足許の細流や、一段颯と簾を落して流るゝさへ、なか／＼に花の色を薄くはせぬ。

あゝ目覺ましいと思ふ目に、ちらりと見たのみ、呉織文織は、恰も一枚の白紙に、朦朧と描いた二個の其の姿を残して餘白を眞黄色に塗つたやう。二人の衣服にも、手拭にも、禪にも、前垂にも、織つて居た其の機の色にも、聊も此の色の中につたゞけ、一入鮮麗に明瞭に、腦中に描き出された。

勿論、描いた人物を判然と浮出させようとして、此の彩色で地を塗潰すのは、畫の手段に取つて、是か、非か、巧か、拙か、それは菜の花の預り知る處でない。

うつとりするまで、眼 前眞黄色な中に、機織の姿の美しく宿つた時、若い婦女の衝と投げた梭の尖

から、ひらりと燃えて、いま一人の足下を閃いて、  
輪になつて一ツ刎ねた、朱に金色を帯びた一條の線  
があつて、赫耀として眼を射て、流のふちなる草に  
飛んだが、火の消ゆるが如くやがて失せた。

赤棟蛇が、菜種の中を輝いて通つたのである。

悚然として、向直ると、突當りが、樹の枝から梢  
の葉へ搦んだやうな石段で、上に、茅ぶきの堂の屋  
根が、目近な一朵の雲かと思える。棟に咲いた紫羅  
傘の花の紫も手に取るばかり、峰のみどりの黒髪に  
さしかざゝれた裳の、其が久龍谷の觀音堂。

我が散策子は、其處を志して來たのである。爾時、  
これから參らうとする、前途の石段の眞下の處へ、  
殆ど路の幅一杯に、兩側から押被さつた雑樹の中か  
ら、眞向にぬつと、大な馬の顔がむく／＼と湧いて  
出た。

唯見る、それさへ不意な上、胴體は唯一ツでない。  
鬣に鬣が繋がつて、胴に胴が重なつて、凡そ五六間

があひだ獣の背である。

咄嗟の間、散策子は杖をついて立竈んだ。

曲角の青大將と、此傍なる菜の花の中の赤棟蛇と、  
向うの馬の面とへ線を引くと、細長い三角形の只中  
へ、封じ籠められた形になる。

奇怪なる地妖でないか。

しかし、若悪獣圍繞、利牙爪可怖も、  
及蝮蝎、氣毒煙火然も、薩陀彼處にましますぞや。  
しばらくして。

のんきな馬士めが、此處に人のあるを見て、はじめて、のつそり馬の鼻頭に顯れた、眞正面から前後三頭一列に並んで、たら／＼下りをゆた／＼と來るのであつた。

「お待遠さまでごぜえます。」

「はあ、お邪魔さまな。」

「御免なせえまし。」

と三人、一人々々聲をかけて通るうち、流のふちに爪立つまで、細くなつて躲したが、尚大なる皮の風呂敷に、目を包まれる心地であつた。

路は一際細くなつたが、却つて柔かに草を踏んで、きり／＼はたり、きり／＼はたりと、長閑な機音に送られて、やがて仔細なく、蒼空の樹の間漏る、石段の下に着く。

此の石段は近頃すっかり修復が出来た。従つて、爪尖のぼりの路も、草が分れて、一筋明らさまになつたから、もう蛇も出まい、其時分は大破して、丁ど繕ひにかゝらうといふ折から、馬は此の段の下

に、一軒、寺といふほどでもない住職の控家がある、  
其の背戸へ石を積んで来たもので。

段を上ると、階子が揺はしまいかと危むばかり、  
角が缺け、石が抜け、土が崩れ、足許も定まらず、  
よるけながら攀ぢ上つた。見る／＼、目の下の田畠  
が小さくなり遠くなるに従うて、波の色が蒼う、ひ  
た／＼と足許に近づくのは、海を抱いた憇る山の、  
何處も同じ習である。

樹立ちに薄暗い石段の、石よりも堆い青苔の中に、  
あの螢袋といふ、薄紫の差俯向いた桔梗科の花  
の早咲を見るにつけても、何となく濕っぽい氣がし  
て、然も湯瀧のあとを踏むやうに熱く汗ばんだのが、  
颯と一風、ひや／＼となつた。境内は然まで廣くな  
い。

尤も、御堂のうしろから、左右の廻廊へ、山の幕  
を引廻して、雑木の枝も墨染に、其處とも分かず松  
風の聲。

渚は浪の雪を敷いて、砂に結び、巖に消える、其の都度音も聞えさう、但残惜いまでびたりと留んだは、きりはたり機の音。

此處よりして見てあれば、織姫の二人の姿は、菜種の花の中ならず、蒼海原に描かれて、浪に泛ぶらむ風情ぞかし。

いや、參詣をしませう。

五段の階、縁の下を、馬が駈け抜けさうに高いけれど、欄干は影も留めない。昔は然こそと思はれた。丹塗の柱、花狭間、梁の波の紺青も、金色の龍も色さみしく、晝の月、茅を漏りて、唐戸に蝶の影さす光景、古き土佐繪の畫面に似て、然も名工の筆意に合ひ、眩ゆからぬが奥床しう、そゞろに尊く懐い。

格子の中は暗かつた。

戸張を垂れた御厨子の傍に、造花の白蓮の、氣高

く佛立つに、頭を垂れて、引退くこと二三尺。心靜かに四邊を見た。

合天井なる、紅々白白牡丹の花、胡粉の佛消え残り、紅も散留つて、恰も刻んだものゝ如く、髣髴として夢に花園を仰ぐ思ひがある。

それら、花にも臺にも、丸柱は言ふまでもない。狐格子、唐戸、桁、梁、ニすものゝ此處彼處、順拝の札の貼りつけてないのは殆どない。

彫金といふのがある、魚政といふのがある、屋根安、大工鐵、左官金。東京の淺草に、深川に。周防國、美濃、近江、加賀、能登、越前、肥後の熊本、阿波の徳島。津々浦々の渡鳥、稻負せ鳥、閑古鳥。姿は知らず名を留めた、一切の善男子善女人。木賃の夜寒の枕にも、雨の夜の苦船からも、夢は此の處に宿るであらう。巡禮たちが靈魂は時々此處に来て遊ぼう。

をかし、一軒一枚の門札めくよ。

五

一座の靈地は、渠等のためには平等利益、樂く美しい、花園である。一度詣でたらむほどのものは、五十里、百里、三百里、筑紫の海の果からでも、思ひさへ浮んだら、束の間に此處に来て、虚空に花降る景色を見やう。月に白衣の姿も拜まう。熱あるものは、楊柳の露の滴を吸ふであらう。戀するものは、優柔な御手に縋りもしよう。御胸にも抱かれよう。はた迷へる人は、緑の薨、朱の玉垣、金銀の柱、朱欄干、瑪瑙の階、花唐戸。玉樓金殿を空想して、鳳凰の舞ふ龍の宮居に、牡丹に遊ぶ麒麟を見ながら、獅子王の座に朝日影さす、櫻の花を衾として、明月の如き眞珠を枕に、勿體なや、御添臥を夢見るかも知れぬ。よしそれとても、大慈大悲、觀世音は咎め給はぬ。

されば是なる彫金、魚政はじめ、此處に靈魂の通ふ證據には、いづれも巡拜の札を見たゞけで、どれもこれも、女名前のも、略々其の容貌と、風采と、従つて其の舉動までが、朦朧として影の如く目

に浮ぶではないか。

彼の新聞で披露する、諸種の義捐金や、建札の表に掲示する寄附金の署名が寫寶である時に、これは理想であると云つても可からう。

微笑みながら、一枚づつ。

扉の方へうしろ向けに、大な寶錢箱の此方、藥研のやうな破目の入つた丸柱を視めた時、一枚懐紙の切端に、すら／＼とした女文字。

うたゝ寐に戀しき人を見てしより

夢てふものは頼みそめてき

―― 玉脇みを ――

と優しく美しく書いたのがあつた。

「これは御参詣で。もし、もし、」

はツと心付くと、麻の法衣の袖をかさねて、出家  
が一人、裾短に藁草履を穿きしめて間近に来て居た。

振向いたのを、莞爾やかに笑み迎へて、

「些と此方へ。」

賽銭箱の傍を通つて、格子戸に及腰。

「南無」とあとは口の裏で念じながら、左右へ  
かた／＼と静に開けた。

出家は、眞直ぐに御厨子の前、かさ／＼と袈裟を  
ずらして、袂からマツチを出すと、伸上つて御蟬を  
点じ、額に掌を合はせたが、引返して最う一枚、イ  
んだ人の前の戸を開けた。

蟲ばんだが一段高く、且つ幅の廣い、部厚な敷居  
の内に、縦に四疊ばかり敷かれる。壁の透間を樹蔭  
はさすが、縁なしの疊は青々と新しかつた。

出家は、上に何にもない、小机の前に坐つて、火

入ればかり、煙草なしに、灰のくすぼつたのを押し出して、自分も一膝、此方へ進め、

「些とお休み下さい。」

また、かさ／＼と袂を探つて、

「やあ、マツチは此處にもござつた、はゝは、  
と、も一机の下から。」

「それではお邪魔を、一寸、拜借」。

と此方は敷居越に腰をかけて、此處からも空に連なる、海の色より、より濃な霞を吸つた。

「眞個に、結構な御堂ですな、住い景色ぢやありませんか。」

「や、最う大破でござつて。おもりをいたす佛様に、恚う申し上げては濟まんでありませぬがな。はゝは、私力にもおいそれとは参りませぬので、行届かん勝でございますよ。」



妙なもので、却つて遠國の衆の、參詣が多うござ  
います。近くは上總下總、遠い處は九州西國あたり  
から、聞傳へて巡禮なさるのがあります處、此方た  
ちが、當地へござつて、此の近邊で聞かれますると、  
つい知らぬものが多くて、大きに迷ふなぞと言ふ、  
お話しを聞くでございますよ。」

「然うしたもんです。」

「はゞ、如何にも、」

と言つて一寸言葉が途切れる。

出家の言は、聊か寄附金の勸化のやうに聞えたの  
で、少し氣になつたが、煙草の灰を落さうとして目  
に留まつた火入の、いぶりくすぶつた色あひ、マツ  
チの燃さしの突込み加減。巢鴨邊に彌勒の出世を待  
つて居る、眞宗大學の寄宿舎に似て、餘り世帶氣が  
ありさうもない處は、大に胸襟を開いて然るべく、  
勝手に見て取つた。

其處で又清々しく一吸して、山の端の煙を吐くこ  
と、遠見の鐵拐の如く、

「夏は嘸涼いでせう。」

「とんと暑さ知らずでござる。御堂は申すまでもありません、下の假庵室なども至極其の涼いので、ほんの草葺でありますが、些と御歸りがけにお立寄り、御休息なさいまし。木葉を燻べて澁茶でも獻じませう。」

「荒れたものでありますが、いや、茶釜から尻尾でも出ませうなら、又一興でござる。はゝゝゝ、」

「お羨い御境涯ですな。」  
「と客は言つた。」

「どうして、貴下、然やうに悟りの開けました智識ではございません。一軒屋の一人住居心寂しうござつてな。唯今も御參詣のお姿を、あれからお見受け申して、あとを慕つて來ましたほどこで。」

時に、どちらに御逗留？」

「私？ 私は直き其の停車場最寄の處に、」

「しばらく、」

「先々月あたりから、」

「いづれ、御旅館で、」

「否、一室借りまして自炊です。」

「は、は、然やうで。いや、不躰でありますが、思召しがござつたら、假庵室御用にお立て申しまする。」

「甚だ唐突でありますが、昨年夏も、お一人な、矢張恁やうな事から、貴下がたのやうな御仁の御宿をいたしたことがあります。」

「御夫婦でも宜しい。お二人ぐらゐは樂でありますから、」

「はい、難有う。」

と莞爾して、

「一寸、通りがゝりでは、恁ういふ處が、此方に

あらうとは思はれませんか。眞個に住い御堂です

ね、

「折々御遊歩においで下さい。」

「勿體ない、おまゐりに來ませう。」  
何心なく言つた顔を、訝しさうに打視めた。

七

出家は膝に手を置いて、  
「これは、貴下方の口から、然う云ふことを承ら  
うとは思はんであります。

「何故ですか、」  
と問うては見たが、豫め、其の意味を解するに  
難うはないのであつた。

出家も、扁くはあるが、ふつくりした頬に笑を含

んで、

「何故と申すでもありませんがな

先づ

當節のお若い方が

と云ふのでござる。

は、は、は、近い話がな。最も然う申すほど、私が、

まだ年配ではありませんけれども、」

「分りましたとも。青年の、然も書生が、とおつ

しやるのでせう。

否、然ふ御遠慮をなさるから、それだから不可ま  
せん。それだから、」

と何、うしたものが、じり／＼と膝を向け直して、

「段々お宗旨が寂れます。此方は何お宗旨だか知  
りませんが。」

對手は老朽ちたものだけで、年紀の少い、今の學  
校生活でもしたものは、逆も濟度はむづかしい、  
今さら、観音でもあるまいと言ふやうなお考へだか  
ら不可んです。

近頃は爺婆の方が横着で、嫁をいぢめる口叱言を、

お念佛ねんぶつで句讀くとうを切きつたり、膚脱はだぬぎで鰻うなぎの串くしを横銜よこくはへで  
題目だいもくを唱となへたり、昔むかしからも然さう云いふのも  
なかつたんぢやないが、まだ／＼胡散うさんながら、地獄ぢごく  
極樂ごくらくが、幾干いくらか念頭ねんとうにあるうちは始末しまつがよかつたの  
です。今いまぢや、生悟なまさとりに皆みんなが悟さとりを開ひらいた顔かほで、惡わる  
くすると地獄ぢごくの繪ゑを見みて、こりや出來できが可いい、などゝ  
言いひ兼ねかません。

貴あなた下方がたが、到底たうてい對手あひてにやなるまいと思おもつてお在い  
でなさる、少わかい人達ひとたちが、却かへつて祖師そしに憧あこがれてます。  
何どいうかして、安心あんしん立命りつめいが得えたいと悶もたえてますよ。  
中なかにはそれがために氣きが違ちがふものもあり、自殺じさつする  
ものさへあるぢやありませんか。

何なんでも構かまはない。途とちう中で、はゝあ、之これが二十世紀せいじ  
の人間にんげんだな、と思おもふのを御覽ごらんなすつたら、男子おとこでも  
女子をんなでもです、唐突だしぬけに南無阿彌陀佛なむあみだぶつと聲こゑをかけて  
お試ためしなさい。すぐきぜつに氣絶きぜつするものがあるかも知しれ  
ず、立處たちどころに天窓あたまを剃そつて御弟子おでしになりたいと言いはうも  
知しれず、八はつと手てを拍うつて悟さとるものもありませう。或あるひ  
はそれが基もとで死しにたくなるものもあるかも知しれませ

ん。

實際、串戯ではない。其のくらゐなんですもの。佛教は是から法燈の輝く時です。それなのに、何故か、貴下がたが因循して引込思案でいらつしやる。」

頻に耳を傾けたが、

「然やう、如何にも、はあ、然やう。いや、私どもとても、堅く申せば思想界は大維新の際で、中には神を見た、まのあたり佛に接した、或は自から救世主であるなど言ふ、當時の熊本神風連の如き、一揆の起りましたやうな事も、ちらほら聞傳へては居りますが、いづれに致せ、高尚な御議論、御研究の方でござつて、此方人等づれ出家がお守りをする、偶像なぞは 其の、」

と言ひかけて、密と御厨子の方を見た。

「作がよければ、美術品、彫刻物として御覧なさらうと言ふ世間。」

或は今後、佛教は盛にならうも知れませんが、兎

も角、偶像の方となりますると  
其の如何  
なものでござらうかと  
同一信仰にいたし  
てからが、御本尊に對し、禮拜と申す方は、此の前  
どうあらうかと存じます。は、は、其處でござい  
ますから、自然、貴下がたには、佛教、即ち偶像教  
でないやうに思召しが願ひたい、御像の方は、高尚  
な美術品を御覽になるやうに、と存じて、つい御遊  
歩など、申すやうな次第でございますよ。」

「いや、いや、偶像でなくつて何うします。御姿  
を拜まないで、何を私たちが信ずるんです。貴下、  
偶像とおつしやるから不可ん。」

名がありませう、一體毎に。」

釋迦、文殊、普賢、勢至、觀音、皆、名があるで

はありませんか。」

「唯、人と言へば、他人です、何でもない。是に  
 名かつきませう。名がつきますと、父となり、  
 母となり、兄となり、姉となります。其處で、其の  
 人たちを、唯、人にして扱ひますか。」

偶像も同一です。唯偶像なら何でもない、此の御  
 堂のは觀世音です、信仰をするんでせう。

「ぢや、偶像は、木、金、乃至、土。それを金銀、  
 珠玉で飾り、色彩を装つたものに過ぎないと言ふん  
 ですか。人間だつて、皮、血、肉、五臟、六腑、そ  
 んなもので束ねあげて、是に衣ものを着せるんです。  
 第一貴下、美人だつて、たかゞそれまでのもんだ。」

しかし、人には靈魂がある、偶像にはそれが無い、  
 と言ふかも知れん。其の、貴下、其の貴下、靈魂が  
 何だか分らないから、迷ひもする、悟りもする、危  
 みもする、安心もする、拜みもする、信心もするん  
 ですもの。

的まがなくつて弓ゆみの修業しゆげふが出来できますか。輕業かるわざ、手品てじなだつて學まなばねばならんのです。

偶像くわうぶつは要いらないと言いふ人ひとに、そんなら、戀人こひとは唯ただ慕したふ、愛あいする、こがるゝだけで、一しよ緒しよにならんでも可いいのか、姿すがたを見みんでも可いいのか。姿すがたを見みたばかりで、口くちを利きかずとも、口くちを利きいたばかりで、手てに絶すがらずとも、手てに絶すがつたゞけで、寢ねないでも、可いいのか、と聞きいて御覽ごらんなさい。

せめて夢ゆめにでも、其その人ひとに逢あひたいのが實情じつじやうです。そら、幻まぼろしにでも神佛かみほとけを見みたいでせう。

釋迦しやか、文殊もんじゆ、普賢ふげん、勢至せいし、觀音くわんおん、御像おすがたは難有ありがたい譯わけではありませんか。」

出家しゆつけは活々いき／＼とした顔かほになつて、目めの色いろが輝かいた。心こころの籠こもつた口くちのあたり、髯ひげの穴あなも數かずへつべう、「申まをされました、おもしろい。」

びたりと膝ひざに手てをついて、片手かたてを額ひたひに加くはへたが、

「　　うたゝ寐に戀しき人を見てしより夢て  
ふものはたのみそめてき　　」  
と獨り俯向いた口の裏に誦したのは、柱に記した  
歌である。

此方も思はず彼處を見た、柱なる蜘蛛の絲、あざ  
やかなりけり水莖の跡。

「然う承れば恥入る次第で、恥を申さねば分らん  
であります、うたゝ寐の、此の和歌でござる、」

「其の歌が、」  
と此方も膝の進むを覺えず。

「えゝ、御覽なさい。其處中、それ巡拜札を貼り  
散らしたと申すわけで、中にはな、賣薬や、何かの  
廣告に使ひまするさうなが、それもありきたりで構  
はんであります。」

又誰が何時のまに貼つて參るかも分りませんので。  
處が、それ、其處の柱の、其の　　」

「はあ、あの歌ですか。」

「御覽になつたで、」

「先刻、貴下が聲をおかけなすつた時に、」

「お目に留まつたのでありませう、其は歌の主が分つて居ります。」

「婦人ですね。」

「然やうで、最も古歌でありますさうで、小野小

町の、」

「多分然うのやうです。」

「詠まれたは御自分でありませんが、いや、丁と其の詠み主のやうな美人でありますな、」

「此の玉脇とか言ふ婦人が、」

と、口では澄まして然う言つたが、胸はそゞろに時めいた。

「成程、今貴下がお話しになりました、其の、御

像がたのことに就ついて、戀人こひごと云々のお言葉ことばを考かんがへて見みま  
すると、是これは、みだらな心こころではなうて、行き方かたこそ  
違ちがひますが、かすかに照てらせ山の端はの月つき、と申し  
たやうに、觀世音くわんぜおんにあこがるゝ心こころを、古歌こかに擬なぞらへ  
たものであつたかも分わかりませぬ。――夢ゆめてふも  
のは頼たのみ初そめてき――夢ゆめになりともお姿すがたをと言い  
ふ。

眞個まことに、あゝいふ世よに稀まれな美人びじんほど、早はやく結縁けちえんい  
たして佛果ぶつくわを得えた驗ためしも澤山たくさんございますから。

それを大搦おほづかみに、戀歌こひかを書かき散ちらして參まゐつた。怪けし  
からぬ事ことと、さ、それも人ひとによりけり、御經おきやうにも、  
若にやくう有よ女人にょにん設せつ欲よく求ぐ男なん、と有ありますから、一いち概がいに咎とがめ  
立たてはいたさんけれども。彼あれがために一人ひとり殺ころしたで  
ござります。――

聞きくものは一驚いっきやうを吃きつした。菜なの花はなに見みた蛇へびのそれ  
より。

九

「まさかとお思ひなさるでありませう、お話が大分唐突でござつたで、」

出家は頼に手をあて、俯いてやゝ考へ、

「いや、しかし戀歌でないとしたして見ますと、其の死んだ人の方が、これは迷ひであつたかも知れんでございます。」

「飛んだ話ぢやありませんか、それは又どうした事ですか。」

と、此方は何時か、最う御堂の疊に、にじり上つて居た。よしありげな物語を聞くのに、懐が窮屈だつたから、懷中に押込んであつた、烏打帽を引出して、傍に差置いた。

松風が音に立つた。が、春の日なれば人よりも軽く、そよ／＼と空を吹くのである。

出家は佛前の燈明を一寸見て、  
「然ればでござつて。」

實は先刻お話し申した、ふとした御縁で、御堂の此の下の假庵室へお宿をいたしました、其の御仁なのであります。

其の貴下、うたゝ寐の歌を、其處へ書きました、婦人のために　　まあ、言つて見ますれば戀

煩ひ、いや、こがれ死をなすつたと申すものでございます。早い話が、

「まあ、今時、どんな、男です。」

「丁ど貴下のやうな方で、」

呀？　茶釜でなく、這般文福和尚、澁茶にあらぬ  
振舞の三十棒、思はず後に瞠若として、  
唯苦笑するある而已

「これは、飛んだ處へ引合ひに出しました、」  
と言つて打笑ひ、

「おつしやる事と申し、矢張恟う云ふ事からお知己になつたと申し、うつかり、これは、」

「否、結構ですとも。戀で死ぬ、本望です。此の太平の世に生れて、戦場で討死をする機会がなけりや、おなじ疊の上で死ぬものを、憧れじにが洒落て居ます。」

華族の金満家へ生れて出て、戀煩ひで死ぬ、此のくらゐ難有い事はありますまい。戀は叶ふ方が可さうなもんですが、然うすると愛別離苦です。

唯死ぬほど惚れると云ふのが、金を溜めるより難いんでせう。」

「眞に御串戯ものでおいでなさる。はゝゝゝ、」

「眞面目ですよ。眞面目だけなほ串戯のやうに聞えるんです。あやかりたい人ですね。よくそんなのを見つけましたね。よくそんな、こがれ死をするほどの婦人が見つかりましたね。」

「それは見ることは誰にでも出来ます。美しいと申して、龍宮や天上界へ参らねば見られないのはござらんで、」

「ぢや現在居るんですね。」

「居りますとも。土地の人です。」

「此の土地のですかい。」

「然も此の久能谷でございます。」

「久能谷の、」

「貴下、何んでございませう、今日此處へお出でなされるには、其の家の前を、御通行になりましたらうで、」

「其の美人の住居の前をですか。」

「と言ふ時、機を織つた少い方の婦人が目に浮んだ、赫耀として菜の花に。」

「ぢや、あの、矢張農家の娘で、」

「否々、大財産家の細君でございます。」

「違ひました、」

「我を忘れて、呟いたが、」

「然うですか、大財産家の細君ですか、ぢや最う

主ある花なんです。ね。」

「然やいうでございます。それがために、貴下、」

「なるほど、他人のものですね。而して誰が見ても綺麗ですか、美人なんですかい。」

「はい、夏向は随分何千人と云ふ東京からの客人で、目の覚めるやうな美麗な方もありまするが、なか／＼此ほどのはないでございます。」

「ぢや、私が見ても戀煩ひをしさうです、危険、危険。」

出家は眞面目に、

「何故でございますか。」

「歸路には氣を注げねばなりません。何處ですか、其の財産家の家は。」

菜種なたねにまじる茅屋かやの彼方あなたに、白波しらなみと、松吹風まつぶくかぜを右みぎ左ひだりり、其處そこに旗はたのやうな薄霞うすがすみに、しつとりと紅くれなゐの染そむ状さまに桃ももの花はなを彩いろどつた、其その屋やの棟むねより、高たかいのは一ツもない。

「角かどの、あの二階家にかいやが、」

「えゝ？」

「彼あれが此この歌うたのかき人ての住居すまひでござつてな。」  
 聞くものは慄然ぞつとした。

出家しゆつげは何なんの氣きもつかずに、

「尤もつとも彼處あそこへは、去年きよねんの秋あき、細君さいくんだけが引越ひきこして参まゐつたので。丁ど私わたくしがお宿やどを致いたした其御仁そのごじんが

お名なは申まをしますまい。」

「それが可ようございます。」

「唯たゞ、客人きやくじん——でお話はなしをいたしませう。其その方かたが、庵室あんじつに逗留とうりう中ちゆう、夜分やぶんな、海うみへ入はいつて亡なくなり

ました。」

「溺れたんですか、」

「と　まあ見えるでございませう、亡骸が

岩に打揚げられてござつたので、怪我が、それとも  
覺悟の上か、其處は先づ、お聞取りの上の御推察で  
ありますが、私は前申す通り、此の歌のためぢや、  
うにな、」

「何しろ、それは飛んだ事です。」

「其の客人が亡くなりまして、二月ばかり過ぎて  
から、彼處へ、」

と二階家の遙なのを、雲の上から蔽ふやう、出家  
は法衣の袖を上げて、

「細君が引越して來ましたので。戀ぢや、迷ぢや、  
といふ一騒ぎござつた時分は、此の濱方の本宅に一

家族、唯今でも其處が本家、まだ横濱に

も立派な店があるのでありまして、主人は大方其方

へ參つて居りませうが。

此の久能谷の方は、女中ばかり、眞に閑靜に住んで居ります。」

「すると別荘なんですね。」

「いや／＼、——どうも話がいろ／＼になります、——處が久能谷の、あの二階家が本宅ぢやさうで、唯今の主人も、あの屋根の下で生れたげに申します。」

其の頃は幽な暮しで、屋根と申した處が、あゝではありますまい。月も時雨もばら／＼暮。それでも先代の親仁と言ふのが、最う唯今では亡くなりまして、それが貴下、小作人ながら大の節儉家で、積年の望みで、地面を少しばかり借りましたのが、私庵室の背戸の地續きで、以前立派な寺がありました。其住職の隠居所の跡だつたさうにございますよ。

豆を植ゑようと、まことに憚う天氣の可い、のど

かな、陽炎がひら／＼畔に立つ時分。

親仁殿、鍬をかついで、此の坂下へ遣つて来て、自分の借地を、先づならしかけたのでございます。

とツ様書上りにせつせえ、と小兒が呼びに来た時分、と申すで、お晝頃でありませうな。

朝疾くから、出しなには寒かつたで、布子の半纏を着て居たのが、其陽氣なり、働き通しぢや。親仁殿は向顛巻、大肌脱で、精々と遣つて居た處。大抵借用分の地券面だけは、仕事が済んで、是から些とほまちに山を削らうといふ料簡。づか／＼山の裾を、穿りかけて居たさうでありますが、小兒が呼びに来たに就いて、一服遣るいべいかで、最う一鍬、すたとんを入れると、急に土が軟かく、づぶ／＼と柄ぐるみにむぐずり込んだで。

づいと、引抜いた鍬について、じと／＼と染んで出たのが、眞紅な、ねぱ／＼とした水ぢや、

「死骸ですか、」と切込んだ。

「大違ひ、大違ひ、」

と、出家は大きくかぶりを掉つて、

「註文通り、金子でござる、」

「成程、穿當てましたね。」

「穿當てました。海の中でも紅色の鱗は目覺しい。土を穿つて出る水も、然ういふ場合には紫より、黄色より、青い色より、其の紅色が一番見る目を驚かせます。」

はて、何んであらうと、親仁殿が固くなつて、もう二三度穿り擴げると、がつくり、うつろになつたので、山の腹へ附着いて、恚う覗いて見たさうにござる。」

「大蛇が顎を開いたやうな、眞紅な土の空洞の中に、づぼらとした黒い塊が見えたのを、鍬の先で掻出して見ると――甕で。

蓋が打缺けて居たさうでございますが、其處からもどろ／＼と、其の丹色に底澄んで光のある粘土やうのものが充満。

別に何んにもありませんので、親仁殿は惜氣もなく打覆して、最一箇あつた、それも甕で、奥の方へ縦にニツ竝んで居たと申します。――さあ、此の方が眞物でござつた。

開けかけた蓋を慌てゝ壓へて、きよろ／＼と其處等ニしたさうでございますよ。

傍に居て覗き込んで居た、自分の小兒をさへ、むやうにして、じろりと見ながら、何う悠々と、肌などを入れて居られませう。

素肌へ、貴下、嬰兒を負ふやうに、それ、脱いで置いたばる半纏で、しつかりくるんで、背負上げて、がくつく腰を、鋏を杖にどっこいなぢや。黙つて居るよ、何んにも言ふな、屹と誰にも饒舌るでねえぞ、と言ひ續けて、内へ歸つて、納戸を閉切つて暗くして、お佛壇の前へ筵を敷いて、其處へざく／＼と装上げた。尤も年が経つて薄黒くなつて居たさうであります、其の晩から小屋は何んもなく暗夜にも明るかつた、と近所のものが話でござつて。

極性な朱でござつたらう、ぶちまけた甕充滿のが、時ならぬ曼珠沙華が咲いたやうに、山際に燃えて居て、五月雨になつて消えましたとな。

些と日数が経つてから、親仁どのは、村方の用達かたノ、東京へ參つた序に芝口の兩換店へ寄つて、汚い煙草入から煙草の粉だらけなのを一枚だけ、そつと出して、幾干に買はつしやる、と當つて見ると、いや抓んだ爪の方が黄色いくらゐでござつたに、正のものとて争はれぬ、七兩ならば引替へにと言ふのを、もつと氣張つてくれさつせえで、とう／＼七

兩一分に替へたのがはじまり。

そちこち、氣長に金子にして、やがて船一艘、古物を買ひ込んで、海から薪炭の荷を廻し、追々材木へ手を出しかけ、船の数も七艘までに仕上げた時、すつぱりと賣物に出して、さて、地面を買ふ、店を擴げる、普請にかゝる。

土臺が極ると、山の貸元になつて、坐つて居て商賣が出来るやうになりました、高利は貸します。

どかとした山の林が、あの裸になつては、店さきへすく／＼と竝んで、いつの間にか金を残しては何處へか參る。

其の筈でござるて。

利のつく金子を借りて山を買ふ、木を伐りかけ、資本に支へる。こゝで材木を抵當にして、又借りる。すぐに利がつく、又伐りかゝる、資本に支へる、又借りる、利でござらう。借りた方は精々と樹を伐り

出して、貸元の店へ材木を並べるばかり。追っかけられて見切つて賣るのを、安く買ひ込んで又儲ける。行つたり、來たり、家の前を通るものが、金子を置いては失せるのであります。

妻子眷屬、一時にどし／＼と殖えて、人は唯、天狗が山を飲むやうな、と舌を卷いたであります。が、蔭ぢや　ー　其の　ー　鍬を杖で胴震ひの一件をな、は／＼、此方人等、其の、も一ツの甕の朱の方だつて、手を押つけりや血になるだ、なぞと、ひそ／＼話を遣るのでござつて、

「恁う云ふ人たちは又可い鹽梅に穿り當てないもんですよ。」

と顔を見合はせて二人が笑つた。

「よくしたものでございます。いくら隠して居ることでも何處を何うして知れますかな。」

いや、それに就いて、

出家は思出したやうに、

「恁う云ふ話がございます。其の、誰にも言ふな、

と堅く口留めをされた齊之助といふ小兒が、（父様は野良へ行つて、穴のない天保錢をドシコと背負つて歸らしたよ。）

如何でござる、はゝゝはゝ。

「なるほど、穴のない天保錢。」

「其の穴のない天保錢が、當主でございます。多額納税議員、玉脇齊之助、令夫人おみを殿、其の歌をかいた美人であります、如何でございます、貴下、」

「先づお茶を一ツ。御約束通り澁茶でござつて、碌にお茶臺もありませんかはりに、がらんとして自然に片づいて居ります。お寛ぎ下さい。秋になりますると、これで町へ遠うございますかはりに、栗柿に事を缺きませぬ。烏を追つて柿を取り、高音を張ります鴟を驚かして、栗を落してなりと差上げませうに。」

まあ、何よりもお樂に、

と袈裟をはづして釘にかけた、障子に緋桃の影法師。今物語の朱にも似て、破目を暖く燃ゆる状、法衣をなぶる風情である。

庵室から打仰ぐ、石の階子は梢にかゝつて、御堂は屋根のみ浮いたやう、緑の雲にふつくりと沈むで、山の裾の、縁に迫つて萌葱なれば、あま下る蚊帳の外に、誰待つとしもなき二人、煙らぬ火鉢のふちかけて、ひら／＼と蝶が来る。

「御堂の中では何んとなく氣もあらたまります。此處でお茶をお入れ下すつた上のお話ぢや、結構過

ぎますほどですが、あの歌に分れて来たので、何んだかなごり惜い心持もします。」

「けれども、石段だけでも、婀娜な御本尊へは路が近うなつてございますから、はゝはゝ。」

實の處 佛の前では、何か私が自分に懺悔でもしまするやうで心苦しい。此處でありますと大きに寛ぐでございます。

師のかげを七尺去ると最うなまけの通りで、困つたものでありますわ。

其處で客人でございます。――  
日頃のお話ぶり、行爲、御容子な、」

「どういふ人でした。」

「それは申しますまい。私も、盲目の垣覗きよりもソツと近い、机覗きで、讀んでおいでなさつた、書物などの、お話も伺つて、何をなさる方ぢやと言

ふ事も存じて居りますが、經文に書いてあることさへ、愚昧に饒舌ると間違ひます。

故人をあやまり傳へてもなりませず、何か評をするやうにも當りますから、唯々、かのな、婦人との模様だけ、お物語りしませうで。

一日晩方、極暑のみぎりでありました。濱の散歩から返つてござつて、（和尚さん、些と海へ行つて御覽なさいませんか。綺麗な人が居ますよ。）

（はゝあ、どんな、貴下、）

（あの松原の砂路から、小松橋を渡ると、急にむかうが遠目金を嵌めたやうに圓い海になつて富士の山が見えますね、）

これは御存じでございませう。」

「知つて居ますとも。毎日のやうに遊びに出ますもの、」

「あの橋の取附きに、松の樹で取廻して――  
松原はづと河を越して廣い洲の林になつて居りま  
すな――而して庭を廣く取つて、大玄關へ石を  
敷詰めた、素ばらしい門のある邸がございませう。  
あれが、それ、玉脇の住居で。

實はあの方を、東京の方がなさる別荘を眞似て造  
つたであります、主人が交際ずきで頻と客をしま  
する處、いづれ海が、何よりの呼物でありますに。  
此の久能谷の方は、些と足場が遠くなりますから、  
すべて、見得装飾を向うへ持つて參つて、小松橋が  
本宅のやうになつて居ります。

其處で、去年の夏頃は、御新姐。申すまでもない、  
そちらに居たでございます。

で其の――小松橋を渡ると、急に遠目金を覗  
くやうな圓い海の硝子へ――ぱつと一杯に映つ  
て、とき色の服の姿が浪の青いのと、巔の白い中へ、  
薄い虹がかつたやうに、美しく靡いて來たのがあ  
る。

と言はれたは、即ち、それ、玉脇の  
で  
ございます。

しかし、其時はまだ誰だか本人も御存じなし、聞  
く方でも分りませんので。どういふ別嬪でありまし  
た、と串戯にな、團扇で煽ぎながら聞いたでござい  
ます。

客人は海水帽を脱いだばかり、未だ部屋へも上ら  
ず、其の縁側に腰をかけながら。

(誰方が、尊いくらゐでした。)

「大分氣高く見えましたな。」

客人が言ふには、

(二三間あひを置いて、おなじやうな浴衣を着た、帯を整然と結んだ、女中と見えるのが附いて通りましたよ。

唯すれ違ひざまに見たんですが、目鼻立ちのはつきりした、色の白いことゝ、唇の紅さつたらありませんでした。

盛装と云ふ姿だのに、海水帽をうつむけに被つて――近所の人でゞもあるやうに、無造作に見えましたつけ。むかう、然うやつて下を見て帽子の廂で日を避けるやうにして來たのが、眞直に前へ出たのと、顔を見合はせて、兩方へ避ける時、濃い睫毛から瞳を涼しくニいたのが、雪舟の筆を、紫式部の硯に染めて、濃淡のぼかしをしたやうだつた。

何んとも言へない、美しさでした。

いや、恚う云ふことをお話しします、私は鳥羽繪に

肖にて居ゐるかも知しれない。

さあ、御飯ごはんを頂いたいで、柄相應がらさうおうに、月夜つきよの南瓜畑たうなすばたけでも又見またみに出でませうかね。)

爾晚そのばんは貴下あなた、唯たゞそれだけの事ことで。

翌日よくじつまた散歩さんぽに出でて、同おなじ時分じぶんに庵室あんしつへ歸かへつて見みえましたから、私わたくしが串戯じやうだんに、

(雪舟せつしゆうの筆ふでは如何いかゞでござつた。)

(今日けふは曇くもつた所せみ爲みか見えませんでした。)

それから二三日にち経たつて、

(まだお天氣てんきが直なほりませんな。些ちと涼すずしすぎるくらゐ、御歩行おひろひには宜よろしいが、矢張雲やはりくもがくれでござつたか。

(否いゝえ、源氏げんじの題だいに、小松橋こまつばしといふのはありませんが、今日けふはあの橋はしの上うへで、)

(それは、おめでたい。)

などゝ笑わらひまする。

(まるで人違ひをしたやうに粹でした。私が是から橋を渡らうと云ふ時、向うの袂へ、十二三を頭に、十歳ぐらゐのと、七八歳ばかりのと、男の兒を三人連れて、其中の小さいのゝ肩を片手で敲きながら、上から覗き込むやうにして、莞爾して橋の上へかゝつて來ます。

どんな婦人でも羨しがりさうな、すなほな、房りした花月巻で、薄お納戸地に、ちら／＼と膚の透いたやうな、何んの中形だか浴衣がけで、それで、きちんとした衣紋附。

紹でせう、空色と白とを打合はせの、模様は一寸分らなかつたが、お太鼓に結んだ、白い方が、腰帶に當つて水無月の雪を抱いたやうで、見る目に、ぞツとして擦れ違ふ時、其の人は、忘れた形に手を垂れた、其の兩手は力なさうだつたが、幽にぶるゝと肩が揺れたやうでした、傍を通つた男の氣に襲はれたものでせう。

通り縋ると、どうしたのか、我を忘れたやうに、

私は、あの、低い欄干へ、腰をかけて了つたんです。抜けたのだなぞと言つては不可ません。下は川です。から、あれだけの流れでも、落ちようもんなら其切です。――淵や瀬でないだけに、救助船とも喚か  
れず、又叫んだ處で、人は串戯だと思つて、笑つて見殺しにするでせう、泳を知らないから、)

と言つて苦笑をしなさつたつけ

それが

眞寶になつたでございます。

何うしたことが、此の戀煩に限つては、傍のものは、あは／＼、笑つて見殺しにいたします。

私はじめ串戯半分、ひやかし旁々、今日は例のは如何で、などゝ申したでございます。

これは、貴下でも然やうでありませう。」

然れば何んと答へよう、喫んでた煙草の灰をはたいて、

「ですがな どうも、これだけは眞面目に介抱は出来かねます。娘が煩ふのだと、乳母が始

末つをする仕し來きたりになつて居をりますがね、男をとこのは困こまり  
ますな。

そんな時とき、其その川かはで沙魚はぜでも釣つつて居ゐたかつたで  
すね。」

「はゞ、是これはをかしい。」  
と出家しゆっけは興きまつありげに八やたと手てを打うつ。

#### 十四

「是これはをかしい、釣つりといへば丁ちやうど其その時とき、向むかう詰つめの  
岸きしに踞しやがんで、ト釣つつて居ゐたものがあつたでござる。  
橋詰はしづめの小店こみせ、荒物あらものを商あきなふ家いえの亭主ていしゆで、身からだ體だの瘦やせて

引ひき緊しまつたには似にない、禪ふんとしの緩ゆるい男をとこで、因いんぐわ果くわとのべつ釣つりをして、はだけて居ゐませう、眞まことにあぶなツかしい形かたちでな。

渾あだな名なを、一もん厘かはらけ土器まをと申まをすでござる。天窓あたまの眞まん中なかの兀はげ工く合あひが、宛さな然ながらですてー川端かはばたの一もん厘かはらけ土器まをー

これが爾その時ときも釣つつて居ゐました。

庵室あんしつの客きやく人じんが、唯たゞ今いま申まをす欄干らんかんに腰こしを掛かけて、おくれ毛越けこしにはら／＼と靡なびいて通とほる、雪ゆきのやうな襟脚えりあしを見送みおくると、今いま、小橋こばしを渡わたつた處ところで、中なかの十と歳を位くらゐのがじやれて、其その腰こしへ抱だき着ついたので、白魚しらをといふ指ゆびを反そらして、輕かるく其その小兒こどもの背中せなかを打うつた時ときだつたと申まをします。

（お坊ぼつちやま、お坊ぼつちやま、）  
と大聲おほこゑで呼よび懸かけて、  
（手巾はんけちが落おちました、）と知しらせたさうであり  
ますが、件くだんの土器かはらけも、餌えびは振舞ふるまふ氣きで、粹いきな後姿うしろすがたを見送みおくつて居ゐたものと見みえますよ。

(やあ、) と言つて、十二三の一番上の兒が、駈けて返つて、橋の上へ落して行つた白い手巾を拾つたのを、懷中へ突込んで、黙つて又飛んで行つたさうで。小兒だから、辭儀も挨拶もないでございます。

御新姐が、禮心で顔だけ振向いて、肩へ、頤をつけるやうに、唇を少し曲げて、其の涼い目で、熟と此方を見返つたのが取違へたものらしい。私が許の客人と、びつたり出會つたであります。

引込まれて、はツと禮を返したが、其ツ切。御新姐の方は見られなくつて、傍を向くと貴下、一厘土器が怪訝な顔色。

いや最う、しつとり冷汗を掻いたと言ふ事、  
こりや成程。極がよくない。

局外のものが何んの氣もなしに考へれば、愚にもつかぬ事なれど、色氣があつて御覽じろ。第一野良聲の調子ツぱづれも可笑い處へ、自分主人でもない

餘所の小兒を、坊やとも、あの兒とも言ふにこそ、  
へつらひがましい、お坊ちやまは不見識の行止り、  
申さば器量を下げた話。

今一方からは、右の土器殿にも小恥かしい次第で  
な。他人のしんせつで手柄をしたやうな、變な羽目  
になつたので。

御本人、然うとも口へ出して言はれませなんだが、  
それから何んとなく鬱ぎ込むのが、傍目にも見えた  
であります。

四五日、引籠つてござつたほどで。

後に、何も彼も打明けて私に言ひなさつた時の話  
では、しかし又其の間違が縁になつて、今度出會つ  
た時は、何んとなく兩方で挨拶でもするやうになり  
はせまいか。然すれば、どんなにか嬉しからう、本  
望ぢや、と思はれたさうな。迷ひと申すはおそろし  
い、情ないものでござる。世聞大概の馬鹿も、これ  
ほどなことはないでございます。

三度目には御本人、

「又出會つたんですかい。」  
と聞くものも待ち構へる。

「今度は反對に、濱の方から歸つて來るのと、濱へ出ようとする御新姐と、例の出口の處で逢つたと  
言ひます。」

大分最う薄暗くなつて居ましたさうで  
土用あけからは、目に立つて日が詰ります處へ、一  
度は一度と、散歩のお歸りが遅くなつて、蚊遣りで  
も我慢が出来ず、私が此處へ蚊帳を釣つて潜込んで  
から、歸つて見えて、晩飯も最う、なぞと、言はれ  
るさへ折々の事。

爾時も、早や黄昏の、とある、人顔、朧ながら月  
が出たやうに、見違へない其人と、思ふと、男が五  
人、中に主人も居たであります。婦人は唯御新姐  
一人、それを取巻く如くにして、どや／＼と些と急  
足で、浪打際の方へ通つたが、其の人数ぢや、空頼

めの、餘所ながら目禮處の騒ぎかい、貴下、其の五人の男と云ふのが。」

十五

「眉の太い、怒り鼻のがあり、額の廣い、顎の尖つた、下目で睨むやうのがあり、仰向けさまになつて、頬髯の中へ、煙も出さず葉巻を突込んで居るのがある。くるりと尻を引捲つて、扇子で叩いたものもある。どれも浴衣がけの下司はいいが、其の中に淺黄の兵兒帶、結目をぶらりと二尺ぐらゐ、こぶらの邊までぶら下げたのと、緋縮緬の扱帯をぐる／＼巻きに胸高は沙汰の限。前のは御自分ものであらうが、扱帯の先生は、酒の上で、小間使のを分捕の次第らしい。」

此これが、不思議ふしぎに客人きやくじんの氣きを悪わるくして、入相いりあひの浪なみも物もの凄すこくなりかけた折せりからなり、彼あの、赤鬼あかおに青鬼あおおになるものが、かよわい人ひとを冥土めいどへ引立ひきたて、行くやうで、思おもひなしか、引挟ひきはさまれた御新姐ごしんぞは、何なんとなく物寂ものさびしい、快こゝろやすからぬ、滅入めいつた容よう子すに見みえて、ものあはれに、命いのちがけにでも其奴等そいつらの中なかから救すくつて遣やりたい感じかんじが起おこつた。家庭かていの様子やうすも略々ほゞ知しれたやうで、氣きが揉もめる、と言いはれたのでありますが、貴下あなた、これは無理むりぢやて。

地獄ぢごくの繪ゑに、天女てんによが天降あまくだつた處ところを描えがいてあつて御覽ごらんなさい。餓鬼がきが救すくはれるやうで尊たふとかる。

蛇へびが、つかはしめぢやと申まをすのを聞きいて、辨財天べんざいてんを、噫あゝ、お氣きの毒どくな、嘸さぞお氣味きみが悪わるから、うと思おもふものはありますまいに。迷まよひぢやね。」

散策子さんさくしは是こゝに少すこしく腕組うでぐみした。

「しかし何なんですよ、女をんなは、自分じぶんの惚ほれた男おとこが、別べつ嬪びんの女房にようぼうを持もつてると、嫉妬やらしいやうですがね。

男おとこは反對はんたいです、」

と聊か論ずる口吻。

「はゝあ、」

「男は然うでない。惚れてる婦人が、小野小町花、大江千里月といふ、對句通りになると安心します。」

唯今の、其の淺黄の兵兒帶、緋縮緬の扱帶と來ると、些と考へねばならなくなる。耶蘇教の信者の女房が、主キリストと抱かれて寐た夢を見たと言ふのを聞いた時の心地と、回々教の魔神になぐさまれた夢を見たと言ふのを聞いた時の心地とは、屹とそれは違ひませう。

どつち路、嬉くない事は知れて居ますがね、前は、先づ／＼と我慢が出来る、後のは、堪忍がなりますまい。

まあ、そんな事は措いて、何んだつて又、然う言ふ不愉快な人間ばかりが其の夫人を取巻いて居るんでせう。」

「其處は、玉脇がそれ鍬の柄を杖に支いて、ぼろ半纏に引くるめの一件で、あゝ遣つて大概な華族も及ばん暮しをして、交際にかけては錢金を惜まんであります、情ない事には、遣方が遣方ゆゑ、身分、名譽ある人は寄つきませんで、悲哉其段は、如何はしい連中ばかり。」

「お待ちなさい、成程、然うすると其の夫人と言ふは、どんな身分の人なんですか。」

出家はあらためて、打領き、且つ咳して、

「其處でございます、御新姐はな、年紀は、さて、誰が目にも大略は分ります、先づ二十三四、それも五六かと言ふ處で、」

「それで三人の母様？ 十二三のが頭ですかい。」

「否、どれも實子ではないでございます。」

「まゝツ兒ですか。」

「三人とも先妻が産みました。此の先妻について、まづ、一くさりの話はあるでございますが、そ

れは餘事ゆゑに申さずとも宜しかる。

二三年前に、今のを迎へたのでありますが、此處  
でありますよ。

何處の生れだか、育ちなのか、誰の娘だか、妹だ  
か、皆目分らんでございます。貸して、かたに取つ  
たか、出して買ふやうにしたか。落魄れた華族のお  
姫様ぢやと言ふのもあれば、分散した大所の娘御だ  
と申すのもあります。然うかと思ふと、箔のついた  
藝娼妓に違ひないと申すもあるし、豪いのは高等淫  
賣の上りだらうなど、甚しい沙汰をするのがござ  
つて、丁と底知れずの池に棲む、ぬしと言ふものゝ  
やうに、素性が分らず、つひぞ知つたものもない様  
子。

「

「何にいたせ、私なぞが通りすがりに見懸けましても、何んとも當りがつかぬでございます。勿論又、坊主に鑑定の出来よう筈はなけれどもな。其の眉のかゝり、目つき、愛嬌があると申すではない。口許なども凜として、世辭を一つ言ふやうには思はれぬが、唯何んとなく賢げに、戀も無常も知り抜いた風に見える。身體つきにも顔つきにも、情が滴ると言つた状ぢや。

戀ひ慕ふものならば、馬土でも船頭でも、われら坊主でも、無下に振切つて邪険にはしさうもない、假令戀はかなへぬまでも、然るべき返歌はありさうな。帯の結目、袂の端、何處へ一寸障つても、情の露は男の骨を溶解かさずと言ふことなし、と申す風情。

然れば、氣高いと申しても、天人神女の倅ではなうて、姫路のお天守に緋の袴で燈臺の下に何やら書を繙く、それ露が滴るやうに婀娜なと言つて、水道

の水で洗ひ髪ではござらぬ。人跡絶えた山中の温泉に、唯一人雪の膚を泳がせて、丈に餘る黒髪を絞るとかの、それに肖まして。

慕はせるより、懐しがらせるより、一目見た男を魅する、力廣大。少からず、地獄、極樂、娑婆も身に附絡うて居さうな婦人、従うて、罪も報も淺からぬげに見えるでございます。

處へ、迷うた人の事なれば、淺黄の帯に緋の扱帯が、牛頭馬頭で逢魔時の浪打際へ引立てゝでも行くやうに思はれたのでありませう。――私どもの客人が――然う云ふ心持で御覽なさればこそ、其後は玉脇の邸の前を通がかり。

濱へ行く町から、横に折れて、背戸口を流れる小川の方へ引廻した蘆垣の蔭から、松林の幹と幹とのなかへ、襟から肩のあたり、くつきりとした耳許が際立つて、帯も裾も見えないのが、浮出したやうに眞中へあらはれて、後前に、是も肩から上ばかり、爾時は男が三人、一ならびに松の葉とすれ／＼に、

しばらく桔梗刈萱が靡くやうに見えて、段々低くなつて隠れたのを、何か、自分との事のために、離座敷か、座敷牢へでも、送られて行くやうに思はれた、後前を引挟んだ三人の漢の首の、兇悪なのが、確に其の意味を語つて居たわ。最う是切、未來まで逢へなからうかとも思はれる、と無理なことを言ふのであります。

さ、是もぢや、玉脇の家の客人だち、主人まじりに、御新姐が、庭の築山を遊んだと思へば、それまでゞありませんうに。

とう／＼表通りだけでは、気が濟まなくなつたと見えて、前申した、其の背戸口、搦手のな、川を一隅でた小松原の奥深く入り込んで、うろつくやうになつたさうで。

玉脇の持地ぢやありますが、此の松原は、野開きにいたしてござる。中には汐入の、一寸大きな池もあります。一面に青草で、これに松の翠がかさなつて、唯今頃は董、夏は常夏、秋は萩、眞個に幽翠な

處、些と行らしつて御覽じろ。」

「薄暗い處ですか、」

「藪のやうではありません。眞蒼な處であります。本でも御覽なさりながらお歩行きには、至極宜しいので、」

「蛇が居ませう、」

と唐突に尋ねた。

「お嫌ひか。」

「何とも、どうも、」

「否、何の因果か、あのくらゐ世の中に嫌はれるものも少なうござる。」

しかし、氣をつけて見ると、あれでもしをらしいもので、路端などを我は顔で伸してる處を、人が参つて、熟と視めて御覽なさい。見返しますがな、極りが悪さうに鎌首を垂れて、向うむきに羞含みますよ。憎くないもので、はゝゝはゝゝ、矢張心がありますよ。」

「心があられては尚困るぢやありませんか。」

「否、鹽氣を嫌ふと見えまして、其の池のまはりには些とも居りません。邸には此頃ぢや、其の魅するやうな御親姐も留主なり、穴はすか／＼と眞黒に、足許に蜂の巢になつて居りまして、蟹の住居、落ちるやうな憂慮もありません。」

## 十七

「客人は、其の穴さへ、白髑體の目とも見えたでありません。」

池をまはつて、川に臨んだ、玉脇の家造を、何か、御新姐のためには牢獄でもあるやうな考へでござるから。

さて、潮のさし引ばかりで、流れるのではありま  
せん、どんより鼠色に淀んだ岸に、浮きもせず、沈  
みもやらず、未始終は碎けて鯉鮒にもなりさうに、  
何時頃のか五六本、丸太が浸つて居るのを見ると、  
あゝ、切組めば船になる。繋合はせば筏になる。然  
るに、綱も棹もない、戀の淵は是で渡らねばならな  
いものか。

生身では渡られない。靈魂だけなら乗れようもの  
を。あの、樹立に包まれた木戸の中には、其の人が、  
と足を爪立つたりなんぞして。

蝶の目からも、餘りふは／＼して見えたでござら  
う。小松の中をふらつく自分も、何んだか其の、肩  
から上ばかりに、裾も足もなくなつた心地、日中の  
妙な蝙蝠ぢやて。

懷中から本を出して、

蠟 光高 懸 照 紗 空、

花房夜搗紅守宮

象口吹香 二 暖、

七星挂城 閨漏板、

寒入罽 二 殿影昏、

彩鸞簾額著霜痕、

えゝ、何んでも此處は、蝸が鉤欄の下に月に鳴く、  
魏の文帝に寵せられた甄夫人が、後におとろへて幽  
閉されたと言ふので、鎖阿甄。とあつて、それから、

夢 入家門 上 沙 渚、

天河 落 處 長 洲 路、

願 君 光 明 如 太 陽、

妾を放て、然うすれば、魚に騎し、波を撒いて去  
らむ、と云ふのを微吟して、思はず、襟にはら／＼  
と涙が落ちる。目を 二 つて、其の水中の木材よ、い  
で、浮べ、鱗ふつて木戸に迎へよ、と睨むばかりに  
瞻めたのでござるさうな。些と尋常事でありませ  
な。

詩は唐詩選にでもありませんか。」

「どうですか。え、何んですつてー。夢に  
家門に入つて沙渚に上る。魂が沙漠をさまよつて一  
歩行くやうね、天河落處長洲路、あ  
はれぢやありませんか。」

それを聞くと、私まで何んだか、其の婦人が、幽  
閉されて居るやうに思ひます。

それから何うしましたか。」

「どうと申して、段々頤がこけて、日に増し目が  
窪んで、顔の色が愈々悪い。」

或時、大奮發ぢや、と言つて、停車場前の床屋へ、  
顔を剃りに行かれました。其の時だったと申す事で。

頭を洗ふし、久しぶりで、些心持も爽になつて、  
ふらりと出ると、田舎には荒物屋が多いでございま  
す、紙、煙草、蚊遣香、勝手道具、何んでも屋と言  
つた店で。床店の筋向うが、矢張其の荒物店であり

ます處、戸外へは水を打つて、軒の提灯には未だ火を點さぬ、溝石から往來へ縁臺を跨がせて、差向ひに将棋を行つて居ます。端の歩が附木、お定りの奴で。

用なしの身體ゆゑ、客人が其處へ寄つて、路傍に立つて、兩方とも矢鱈に飛車角の取替へこ、ころり／＼差違へる毎に、ほい、ほい、と言ふ勇ましい懸聲で。おまけに一人の親仁なぞは、媽々衆が行水の間、引渡されたものと見えて、小兒を一人胡坐の上へ抱いて、雁首を俯向けに銜へ煙管。

で銜へたまんま、待てよ、どつこい、と言ふ毎に、煙管が打附りさうになるので、抱かれた兒は、親仁より、餘計に額皺を寄せて、雁首を狙つて取らうとする。火は附いて居ないから、火傷はさせぬ

よだれを垂々と垂らしながら、占た！ とばかり、矢庭に對手の玉將を引搦むと、大きな口をへの字形に結んで見て居た赭ら顔で、脊高の、胸の大きい禪門が、鐵挺のやうな親指で、いきなり勝つた方の鼻

つ頭はしらをぐいと搥つかんで、豪えらいぞ、と引伸ひんのばしたと思おほし召めせ、はゝゝはゝ。」

十八

「大きな、ハツクサメをすると煙草たばこを落おとした。額おでここツつりで小兒こどもは泣なき出す、負まけた方は笑わらひ出す、涎よだれと何なんかと一緒しよでござらう。鼻はなをつまんだ禪門ぜんもん、苦々にが／＼しき顔色がんしよくで、指ゆびを持餘もてあました、鹽梅あんばいな。」

これを機し會ほに立去たちさらうとして、振返ふりかへると、荒物屋あらかものやと葭簀よしず一枚まい、隣家りんかが間まに合あはせの郵便局いうびんきょくで。其處そこの門口かどぐちから、すらりと出でたのが例れいの其人そのひと。汽車きしゃが着ついたと見みえて、馬車ばしや、車くるまがら／＼と五六臺だいい、それを見

に出たものらしい、郵便局の軒下から往來を透かすやうにした、目が、ばつたり客人と出逢つたでありませう。

心ありさうに、然うすると直ぐに身を引いたのが、隔ての葎簾の陰になつて、顔を背向けもしないで、其處で向直つて此方を見ました。

軒下の身を引く時、目で引つけられたやうな心持がしたから、此方も又葎簾越に。

爾時は、總髪の銀杏返で、珊瑚の五分珠の一本差、髪かみの所せ爲みか、いつもより眉まゆが長ながく見みえたと言いひます。浴衣ゆかたながら帯おびには黄金鎖きんくさりを掛かけて居ゐたさうでありますが、揺ゆれて其その音おとのするほど、此方こつちを透すかすのに胸むねを動うごかした、顔かほがさ、葎簾よしずを横よこにちら／＼と霞かすみを引ひいたかと思おもふ、是これに眩めくらめくばかりになつて、思おもはず一寸つと會釋あしやくをする。

下した、高たかく響ひびいたのは電話でんわの報知しらせぢや。向むかうも、伏目ふしめに俯向うつむいたと思おもふと、リン／＼と貴あな

是を待つて居たでございませぬ。

すぐに電話口へ入つて、姿は隠れましたが、淺間  
ゆゑ、よく聞える。

（はあ、私。あなた、餘りですわ。餘りですわ。

何うして来て下さらないの。怨んで居ますよ。あの、  
あなた、夜も寝られませんか。はあ、夜中に汽車のつ  
くわけはありませんけれども、それでも今にもね、  
来て下さりはしないかと思つて。

私の方はね、もうね、一寸 どんなに離

れて居りましても、あなたの聲はね、電話でなくつ  
ても聞えます。あなたには通じますまい。

どうせ、然うですよ。それだつて、こんなにお待ち  
ち申して居る、私の爲ですもの 氣をかね

てばかりいらつしやらなくても宜しいわ。些とは不  
義理、否、父さんやお母さんに、不義理と言ふこと  
もありませんけれど、ね、私は生命かけて、吃とで  
すよ。今夜にも、寝ないでお待ち申しますよ。あ、  
あ、たんと、そんなことをお言ひなさい、どうせ寝

られないんだから可うございます。怨みますよ。夢  
にでもお目にかゝりませうねえ、否、待たれない、  
待たれない

お道か、お光か、女の名前。

（ みいちゃん、然やうなら、夢で逢ひ

ますよ。）

——きり／＼と電話を切つたて。）

「へい、」  
と思はず聞惚れる。

「其日は歸つてから、豪い元氣で、私はそれ、涼  
しさやと言つた句の通り、縁から足をぶら下げる。

客人は其處の井戸端に焚きます据風呂に入つて、湯  
をつかひながら、露出しの裸體談話。

其方と、此方で、高聲でな。尤も隣近所はござら  
ぬ。かけかまひなしで、電話の假聲まじりか何かで、

（やあ、和尚さん、梅の青葉から、湯氣の中へ絲  
を引くのが、月影に光つて見える、蜘蛛が下りた、）

と大氣燄ぢや。

( 萬歳々々、今夜お忍か。 )

( 勿論、 )

と答へて、頭のあたりをざふ／＼と、仰いで天に愧ぢざる顔色でありました。が、日頃の行ひから察して、如何に、思死をすればとて、苟も主ある婦人に、然ういふ不料簡を出すべき仁でないと思ひました、果せる哉。

冷奴に紫蘇の實、白瓜の香の物で、私と取膳の飯を上ると、帯を緊め直して、

( もう一度そこいらを。 )

いや、これはと、ぎよつとしたが、垣の外へ出られた姿は、海の方へは行かないで、それ、其の石段を。

一面の日當りながら、蝶の羽の動くほど、山の草に薄雲が軽く靡いて、檐から透すと、峰の方は暗か

つた、餘り暖さが過ぎたから。

十九

降らうも知れぬ。日向へ蛇が出て居る時は、雨を  
持つといふ、來がけに二度まで見た。

で、雲が被つて、空氣が濕つた所爲か、笛太鼓の  
囃子の音が山一ツ越えた彼方と思ふあたりに、蛙が  
啣くやうに、遠いが、手に取るばかり、然も沈んで  
うつゝの音樂のやうに聞えて來た。霽で蟬管の出來  
た蓄音器の如く、且つ遙に響く。

それまでも、何かそれらしい音はしたが、極めて散漫で、何の聲とも纏まらない。村々の蔀、柱、戸障子、勝手道具などが、日永に退屈して、のびを打ち、欠伸をする氣勢かと思つた。未だ晝前なのに、

「――時々牛の鳴くのが入交つて――時に笑ひ興ずるやうな人聲も、動かない、静かに風に傳はるのであつた。」

フト耳を澄ましたが、直ぐに出家の言になつて、

「大分町の方が賑ひますな。」

「祭禮でもありませんか。」

「これは停車場近くにいらつしやると承りましたに、つい御近所でございます。」

停車場の新築開き。」

如何にも一月ばかり以前から取沙汰した今日は當日。規模を大きく、建直した落成式、停車場に舞臺がかゝる、東京から俳優が来る、村のものゝ茶番がある、餅を撒く、昨夜も夜通し騒いで居て、今朝來がけの人通りも、よけて通るばかりであつたに、はたと忘れて居たらしい。

「まつたくお話しに聞惚れましたか、此方が里離れて閑静な所爲か、些とも氣が附ないで居りました。寶は餘り騒々しいので、そこを遁げて參つたのです。しかし降りさうになつて來ました。」

出家の額は仰向けに廂を潛つて、

「ねんばり一濕りでございませう。地雨にはなりませんまい。何、又、雨具もござる。芝居を御見物の思召がなくなれば、まあ御緩りなすつて。」

あの音もさ、面白可笑く、此方も見物に參る氣でもござると、どつと落着いては居られない程、浮いたものでありますが、さて恚う、かけかまひなしに、遠ざかつて居りますと、世を一ツ隔てたやうに、寂しい、陰氣な、妙な心地がいたすではありませんか。

「眞箇ですな。」

「昔、井戸を掘ると、地の下に犬鶏の鳴く音、人聲、牛車の軋る音などが聞えたといふ話があります。それに似て居りますな。」

峠から見る、霧の下だの、暗の浪打際、ぼくと灯  
が映る處だの、恚やうに山の腹を向うへ越した地の  
裏などで、聞きますのは、をかしく人間業でないや  
うだ。夜中に聞いて、狸囃子と言ふ芸も至極でござ  
います。

いや、それに、就きまして、お話の客人でありま  
すが、

と、茶を一口急いで飲み、さしおいて、

「さて今申した通り、夜分に此の石段を上つて行  
かれたのであります。

しかし此は情に激して、發奮んだ仕事ではなかつ  
たのでございます。

恚うやつて、比の庵室に馴れました身には、石段  
はつい、通ひ廊下を縦に通るほどな心地であります  
からで。客人は、堂へ行かれて、柱板敷へひら／＼  
と大きくさす月の影、海の果には入日の雲が焼残つ  
て、ちら／＼眞紅に、黄昏過ぎの渾沌とした、水も  
山も唯一面の大池の中に、其の軒端洩る夕日の影と、  
消え残る夕焼の雲の片と、紅蓮白蓮の咲乱れたやう

な眺望をなさつたさうな。これで御法の船に同じい、  
御堂の縁を離れさへなさらなかつたら、海に溺れる  
やうなことも起らなんだでございませう。

爰に希代な事は――

堂の裏山の方で、頻りに、其の、笛太鼓、囃子が

聞えたと申す事――

唯今、それ、聞えますな。あれ、あれとは、まるで  
方角は違ひます。」

と出家は法衣でづいと立つて、廂から指を出して、  
御堂の山を左の方へぐいと指した。立ち方の唐突な  
のと、急なのと、目前を塞いだ墨染に、一天する墨  
を流すかと、袖は障子を包んだのである。

「堂の前を左に切れると、空へ抜いた隧道のやうに、両端から突出しました巖の間、樹立を潜つて、裏山へかゝるであります。」

兩方谷、海の方は、山が切れて、眞中の路を汽車が通る。一方は一谷落ちて、それからそれへ、山又山、次第に峰が重なつて、段々雲霧が深くなります。處々、山の尾が樹の根のやうに集つて、廣々とした青田を抱へた處もあり、炭焼小屋を包んだ處もございませす。

其處で、此の山傳ひの路は、岨の上を高い堤防を行く形、時々、島や白帆の見晴しへ出ますばかり、あとは生繁つて眞暗で、今時は、然までもありません。せぬが、草が繁りますと、分けずには通られません。

谷には鷲、峰には目白四十雀の轉つて居る處もあり、紺青の巖の根に、春は董、秋は龍膽の咲く處。山清水がしと／＼と湧く徑が薬所の底のやうで、兩

側の篠笹を跨いで通るなど、ものゝ小半道踏分けて参りますと、其處までが一峰で。それから峩になつて、郡が違ひ、海の趣もかはるのでありますが、其峩の上に、たとへて申さば、此の御堂と背中合はせに、山の尾へ凭つかゝつて、彼は大佛ぐらゐな、石地藏が無手と胡坐してござります。それがさ、石地藏と申し傳へるばかり、餘程のあら刻みで、まづ坊主形形の自然石と云うても宜しい。妙に御顔の尖がつた處が、拜むと凄うござつてな。

堂は形だけ残つて居りますけれども、勿體ないほど大破いたして、密と参つても床なぞつぶ／＼と踏叛きますわ。屋根も柱も蜘蛛の巣のやうに狼籍として、これは又境内へ足の入場もなく、峩へかけて倒れてな、でも建物があつた跡ぢや、見霽しの廣場になつて居りますから、これから山越をなさる方が、うつかり其處へござつて、唐突の山佛に膽を潰すと申します。

其處を山続きの留りにして、向うへ降りる路は、又此の石段のやうなものではありません。わづかの

間も九十九折の坂道、峻い上に、懃か石を入れたあ  
とのあるだけに、爪立つて飛々に這ひ下りなければ  
なりません、此の坂の両方に、五百體千體と申す  
數ではない。それは／＼數へ切れぬくらゐ、いづれ  
も一尺、一尺五寸、御丈三尺といふのはない、小  
な石佛がすく／＼竝んで、最も長い年月、路傍へ轉  
げたのも、倒れたのもあつたであります、さす  
がに跨ぐものはないと見えます。もたれなりにも櫛  
の齒のやうに揃つてあります。

是について、何かいはれのございましたことが、  
一々女の名と、亥年、午年、幾年、幾年、年齢とが  
彫りつけてございましてな、何時の世にか、諸國の  
婦人たちが、擧つて、心願籠めたものでございませ  
う。處で、雨露に黒髪は霜と消え、袖裾も苔と變つ  
て、影ばかり残つたが、お面の細く尖つた處、以前  
は女體であつたらうなどといふ、いや女體の地藏と  
いふはありませんが、扨て然う聞くと、なほ氣味が  
悪いではございませんか。

え、つかぬことを申したやうであります、客

人じんの話はなしについて、些ちと考かんがへました事ことがござる。客人きやくじんは、それ、其その山路やまみちを行ゆかれたので――此この觀くわん音おんの御堂みだうを離はなれて、

「成程なるほど、其その何なんとも知しれない、石像せきざうの處ところへ、」  
と胸むねを伏ふせて顔かほを見みる。

「いや／＼、其處そこまでゞはありません。唯たゞ其その山路やまみちへ、堂だうの左ひだりの、巖間いはまを抜ぬけて出でたものでございませぬ。

トいふのが、手てに取とるやうに、噓はやしの音おとが聞きえたからで。

直ぢき其その谷間たにあひの村むらあたりで、騒さわいで居ゐるやうに、  
ト／＼と山腹さんぶくへ響ひびいたと申まをすのでありますから、  
一寸裏山ちよつとらやまへ廻まはりさへすれば、足許あしもとに瞰み下おろされま  
すやうな勘定かんぢやうであつたので。客人きやくじんは、高たかい處ところから見物けんぶつ  
をなさる氣きでござつた。

入り口いりぐちはまだ月つきのたよりがございます。樹きの下したを、  
草くさを分わけて參まゐりますと、處々ところ／＼窓まどのやうに山やまが切きれて、

其處から、松葉搔、枝拾ひ、じねんじよ穿が谷へさ  
して通行する、下の村へ續いた路のある處が、彼方  
此方に幾干もございます。

それへ出ると、何處でも廣々と見えますので、最  
初左の濱庇、今度は右の茅の屋根と、二三箇處、其  
切目へ出て、覗いたが、何處にも、祭禮らしい處は  
ない。海は明るく、谷は煙つて。」

二十一

「けれども、其の躰子の音は、草一叢、樹立一畝  
出さへすれば、直き見えさうに聞えますので。二足  
が三足、五足が十足になつて段々深く入るほど――  
此處まで來たのに見ないで歸るも殘惜い氣もする

上に、何んだか、舊へ歸るより、前へ出る方が路も  
明いかと思はれて、些と急足になると、路も大分上  
りになつて、ぐいと伸上るやうに、思ひ切つて眞暗  
な中を、草を雀つて、身を退いて高い處へ。ぼんや  
り薄明るく、地ならしがしてあつて、心持、墓地の  
繩張の中でゞもあるやうな、平な丘の上へ出ると、  
月は曇つて了つたか、それとも海へ落ちたかといふ、  
一方は今來た路で向うは岨、谷か、それとも濱邊か  
は、判然せぬが、底一面に靄がゞつて、其の靄に、  
ぼくと遠方の火事のやうな色が映つて居て、篝でも  
焼いて居るか、底澄んで赤く見える、其の邊に、  
太鼓が聞える、笛も吹く、ワアといふ人聲がする。

如何にも賑かさうだが、さて何處とも分らぬ。客  
人は、其の朦朧とした頂に立つて、境は接しても、  
美濃近江、人情も風俗も皆違ふ寢物語の里の祭禮を、  
此處で見るかと思はれた、と申します、

其上、宵宮にしては些と賑か過ぎる、大方本祭の  
夜？ それで人の出盛りが通り過ぎた、餘程夜更ら  
しい景色に視めて、しばらく茫然としてござつたさ

うな。

ト何んとなく、心寂しい。路も餘程歩いたやうな氣がするので、うつとり草臥れて、最う歸らうかと思ふ時、其の火氣を包んだ靄が、恚う風にでも動くかと覺えて、谷底から上へ、裾あがり次第に色が濃うなつて、向うの山かけて映る工合が直き目の前で燃して居る景色　――　最も靄に包まれながら

――  
其處で、何か見極めたい氣もして、其の平地を眞直に行くと、まづ、それ、山の腹が覗かれましたわ。

これはしたり！　祭禮は谷間の里からかけて、此處が其のとまりらしい。見た處で、薄くなつて段々に下へ灯影が濃くなつて次第に賑かになつて居ます。

矢張同一やうな平な土で、客人のござる丘と、向うの丘との中に箕の形になつた場所。

爪尖も、迂らず、靜に安々と下りられた。

處が、箕の形の、一方はそれ祭禮に續く谷の路で  
ございませう。其の谷の方に寄つた疊なら八疊ばかり、  
油が廣く染んだ體に、草がすつぺりと禿げました。  
「

といひかけて、出家は瀬戸物の火鉢を、縁の方へ  
少しずらして、俯向いて手で疊を仕切つた。

「これだけな、赤地の出た上へ、何か恚うぼんやり  
躓つたものがある。」  
ト足を崩して兎角して膝に手を置いた。

思はず、外の方を見た散策子は、雲の稍軒端に近く  
迫るのを知つた。

「手を上げて招いたと言ひます。―― ゆつたりと  
―― 行くともなしに前へ出て、それでも間  
二三間隔つて立停まつて、見ると、其の躓つたものは、  
顔も上げないで俯向いたまゝ、股引やうのものを  
穿いて居る、草色の太い胡坐かいた膝の脇に、差  
置いた、拍子木を取つて、カチ／＼と鳴らしたさう

で、其の音が何者か齒を噛合はせるやうに響いたと言ひます。

然うすると、

「はあ、はあ、」

「薄汚れた帆木綿めいた破穴だらけの幕が開いたて、」

「幕が、」

「然やう。向う山の腹へ引いてあつたが、矢張り霧に見えて居たので、其ものゝ中に、網が引いてあつたと見えます、踞つたまゝで立ちもせんので。」

窪んだ浅い横穴ぢや。大きかつたといひますよ。正面に幅一間ばかり、尤も、此の邊には一寸々然ういふのを見懸けます。背戸に近い百姓屋などは、漬物桶を置いたり、青物を活けて重寶がる。で、幕を開けたからには其れが舞臺で。」

「成程、然う思へば、舞臺の前に、木の葉がばら／＼と散ばつた中へ交つて、投銭が飛んで居たらしく見えたさうでございます。

幕が開いた。――と、まあ、言ふ體であります  
が、切唯浅い、扁い、窪みだけで。何んの飾つけも、  
道具だてもあるのではござらぬ。何か、身體もぞく  
／＼して、餘り見て居たくもなかつたさうだが、自  
分を見懸けて、はじめたものを、他に誰一人居るで  
はなし、今更歸るわけにもなりませんやうな羽目に  
なつたとか言つて、懐中の紙人に手を懸けながら、  
茫乎見て居たと申します。

また、陰氣な、濕つぽい音で、コツ／＼と拍子木  
を打違へる。

矢張り其のものゝ手から、づうと絲が繋がつて居た  
ものらしい。舞臺の左右、山の腹へ斜めにかゝつた、  
一幅の白い霽が同じく幕でございました。むら／＼

と両方から舞臺際へ引寄せられると、煙が渦くやうに疊まれたと言ひます。

不細工ながら、窓のやうに、箱のやうに、黒い横穴が小さく一ツづゝ三十五と一側竝べに仕切つてあつて、其の中に、ずらりと婦人が並んで居ました。

坐つたのもあり、立つたのもあり、片膝立てたしだらくな姿もある。緋の長襦袢ばかりのもある。頬のあたりにもある。緋の長襦袢ばかりのもある。縛られて居るのもある、一目見たが、遠くの方は、小さくなつて、幽になつて、唯顔ばかり谷間に白百合の咲いたやう。

慄然として、遁げもならない處へ、またコン／＼と拍子木が鳴る。

すると貴下、谷の方へ續いた、其何番目かの仕切の中から、ふらりと外へ出て、それだけで、一人、小さな婦人の姿が、音もなく歩行いて来て、やがて其の舞臺へ上つたでございませうが、其處へ來ると、並の大きさの、しかも、すらりとした脊丈になつて、

しよんぼりした肩の處へ、恚う、頤をつけて、熟と  
客人の方を見向いた、其の美しさ！  
正しく玉脇の御新姐で。」

二十三

「寝衣にぐる／＼と扱帯を巻いて、霜のやうな跣  
足、其まゝ向うむきに、舞臺の上へ、崩折れたやう  
に、ト膝を曲げる。  
カンと木を入れます。」

釘づけのやうになつて立窘んだ客人の背後から、  
背中を摺つて、ブツと出たものがある。

黒い影で。

見物が他にも居たかと思ふ、と然うではない。其の影が、よろ／＼と舞臺へ出て、御新姐と背中合せにびつたり坐つた處で、此方を向いたでございませう、顔を見ると自分です。」

「えゝ！」

「それが客人御自分なのであります。」

で、私へお話に、

（眞個なら、其處で死なゝければならんのでした、）

と言つて歎息して、眞蒼になりましたつけ。

何うするか、見て居たかつたさうです。勿論、肉は躍り、血は湧いてな。

しばらくすると、其の自分が、稍身體を捻ぢ向け、惚々と御新姐の後姿を見入つたさうで、指の尖で、薄色の寢衣の上へ、恚う山形に引いて、下へ一

ツ、 を書いたでございますな、三角を。

見て居る胸はヒヤ／＼として冷汗がびつしよりになる。

御新姐は唯首垂れて居るばかり。

今度は四角、 を書きました。

其の男、即客 人御自分が。

御新姐の膝にかけた指の尖が、わな／＼と震へました  
とな。

三度目に、 圓いものを書いて、線の端がまとまる時、颯と地を拂つて空へ抉るやうな風が吹くと、谷底の灯の影がすつきり冴えて、鮮かに薄紅梅。濱か、海の色か、と見る耳許へ、ちやら／＼と鳴つたのは、投げ銭と木の葉の摺れ合ふ音で、くる／＼と廻つた。

気がつくと、四五人、山のやうに背後から押被さつて、何時の間にか他に見物が出来たて。

爾時、御新姐の顔の色は、こぼれかゝつた艶やかなおくれ毛を透いて、一入美しくなつたと思ふと、あの其の口許で莞爾として、うしろざまにたよ／＼と、男の足に背をもたせて、膝を枕にすると、黒髪が、づる／＼と仰向いて、眞白な胸があらはれた。其の重みで男も倒れた、舞臺がぐん／＼ずり下つて、はツと思ふと舊の土。

峰から谷底へかけて哄と聲がする。そこから夢中で駈け戻つて、蚊帳に寝た私に縋りついて、

(水を下さい。)

と言うて起された、が、身體中疵だらけで、夜露にずぶ濡であります。

それから曉かけて、一切の懺悔話。

翌日は一日寝てござつた。午すぎに女中が二人ついで、此の御堂へ參詣なさつた御新姐の姿を見て、私は慌てゝ、客人に知らさぬやう、暑いのに、貴下、此の障子を閉切つたでございますよ。

以來、あの柱に、うたゝ寐の歌がありますので。

客人はあと二三日、石の唐櫃に籠つたやうに、我  
と我を、手足も縛るばかり、謹んで引籠つてござつ  
たし、私も亦油断なく見張つて居たでございませうが、  
貴下、聊か目を離しました僅の隙に、何處か姿が見  
えなくなつて、木樵が来て、點燈頃、  
(私、今、來がけに、彼處さ、蛇の矢倉で見かけ  
たよ、)

と知らせました。

客人は又其晩のやうな芝居が見たくなつたのでご  
ざいませう。

死骸は海で見つかりました。

蛇の矢倉と言ふのは、此の裏山の二ツ目の裾に、  
水のたまつた、むかしからある横穴で、わツといふ  
と、おうーと底知れず奥の方へ十里も廣がつ  
て響きます。水は海まで續いて居ると申傳へるであ  
りませんが、如何なものでございませうかな。」

雨が二階家の方からかゝつて来た。音ばかりして  
草も濡らさず、裾があつて、路を通ふやうである。  
美人の靈が誘はれたらう。雲の黒髪、桃色衣、菜種  
の上を蝶を連れて、庭に来て、陽炎と竝んで立つて、  
しめやかに窓を覗いた。

### 春晝後刻

## 二十四

此雨は間もなく張れて、庭も山も青き天鷲絨に蝶  
の刺繡ある霞を落した。何んの餘波やら、庵にも、  
座にも、袖にも、菜種の薫が染みたのである。

出家は、さて日が出口から、裏山の其の蛇の矢倉

を案内しよう、と老實やかに勧めたけれども、此の際、観音の御堂の背後へ通り越す心持はしなかつたので、挨拶も後日を期して、散策子は、やがて庵を辭した。

差當り、出家の物語について、何んの思慮もなく、批評も出来ず、感想も陳べられなかつたので、言はれた事、話されただけを、不殘鵜呑みにして、天窓から詰込んで、胸が膨れるまでになつたから、獨り靜に歩行きながら、消化して胃の腑に落ちつけようと思つたから。

對手も出家だから仔細はあるまい、（然やうなら）が些と唐突であつたかも知れぬ。

處で、石段を背後にして、行手へ例の二階を置いて、吻と息をすると

「轉寐に

と先づ口の裏で云つて見て、小首を傾けた。杖が邪魔なので腕の處へ揺り上げて、引包んだ其の袖と

もに腕組をした。菜種の花道、幕の外の引込みには引立たない野郎姿。雨上りで照々と日が射すのに、薄く一面にねんばりした足許、這つて轉ばねば可い。

「戀しき人を見てしより

夢てふもの

は、

と一寸顔を上げて見ると、左の岨から椎の樹が横に出て居る。――遠くから視めると、これが石段の根を仕切る緑なので、――庵室は最う右手の背後になつた。

見たばかりで、すぐに又、

「夢と言へば、これ、自分も何んだか夢を見て居るやうだ。やがて目が覺めて、あゝ、轉寐だつたと思へば夢だが、此まゝ、覺めなければ夢ではなからう。何時か聞いた事がある、狂人と眞人間は、唯時間长短だけのもので、風が立つと時々波が荒れるやうに、誰でも一寸々は狂氣だけれど、直ぐ、仄ぎになつて、のたり／＼かなで濟む。もしそれが靜まらないと、浮世の波に乗つかつて我々、ふら／＼と腦が揺れる、木靜まらんと欲すれども風やまず

と来た日にや、船に酔ふ、其の浮世の波に浮んだ船  
に酔ふのが、立處に狂人なんだと。

危険々々。

ト来た日にや夢も又同一だらう。目が覺めるから、  
夢だけれど、いつまでも覺めなけりや、夢ぢやある  
まい。

夢になら戀人に逢へると極れば、こりや一層夢に  
してつて、世間で、誰其は？ と尋ねた時、はい、  
とか何んとか言つて、蝶々二つで、ひら／＼なんぞ  
は悟つたものだ。

庵室の客人なんざ、今聞いたやうだと、夢てふも  
のを頼み切りにしたのかな。」

と考へが道草の蝶に誘はれて、ふは／＼と玉の緒  
が菜の花ぞひに伸びた處を、風もないのに、颯とば  
かり、横合から雪の腕、緋の襟で、つと爪尖を反ら  
して足を踏伸ばした姿が、眞黒な馬に乗つて、蒼空

を翻然と飛び、帽子の廂を掠めるばかり、大波を乗つて、一跨ぎに紅の虹を躍り越えたものがある。

はたと、これに空想の前途を遮られて、驚いて心付くと、赤棟蛇のあとを過ぎて、機を織る婦人の小家も通り越して居たのであつた。

音はと思ふに、きりはたりする聲は聞えず、山越えた停車場の笛太鼓、大きな時計の秒コンドの如く、胸に響いてトンと鳴る。

筋向ひの垣根の際に、此方を待ち受けたものらしい、鋏を杖いて立つて、莞爾ついて、のつそりと親仁あり。

「はあ、もし今は歸らせえますかね。」

「や、先刻は。」

其の莞爾々々の顔のまゝ、鋏を離した手を揉んで、  
 「何んともハイ御しんせつに言はつせえて下せえ  
 やして、お庇様で、私、えれえ手柄して禮を聞いた  
 でござりやすよ。」

「別に迷惑にもならなかつたかい。」  
 と悠々として云つた時、少なからず風采が立上つ  
 て見えた。勿論、對手は件の親仁だけれど。

「迷惑處ではござりましねえ、かさね／＼禮を  
 言はれて、私大く難有がられました。」

「ぢや、むだにならなかつたかい、お前さんが始  
 末をしたんだね。」

「竹ン尖で壓へつけてハイ、山の根つこさ藪の中  
 へ棄てたでござえます。女中たちが殺すなど言ふけ  
 え。」

「その方が心持が可い、命を取つたんだと、そん  
 なにせずとも、事を、私が訴人したんだから、怨み

があれば、此方へ取付くかも分らずさ。」

「はゝはゝ、旦那様の前だが、矢張り好きではねえでがすな。奥に居た女中は、蛇がと聞いたゞけでアレソレ打騒いで戸障子へ當つたゞよ。」

私先づ庭口から入つて、其處さ縁側で案内して、それから臺所口に行つて彼方此方探索のした處、何が、お前様御勘考さ違はねえ、湯殿の西の隅に、ベいら／＼舌さあ吐いとるた。  
思つたより大うがした。

畜生め。われさ行水するだら蛙飛込む古池と云ふへ行けさ。化粧部屋覗きをつて白粉つけてどうしるだい。白鷺にでも押惚れたかと、ぐいとなやして動かさねえ。どうしべいな、長アくして思案のして居りや、遠くから足の尖を爪立つて、お殺しでない、打棄つておくれ、御新姐は病氣のせいで物事にしでなんねえから、と女中たちが口を揃へて云ふもんだでね、藝もねえ、殺生するにや當らねえでがすから、藪畳みへ潜らして退けました。

御新姐は、氣分が勝れねえとつて、二階に寝てござらしけえ。

今しがた小雨が降つて、お天氣が上ると、お前様、雨よりは大きい紅色の露がぼつたり／＼する、あの桃の木の下の許さ、背戸口から御新姐が、紫色の蝙蝠傘さして出てござつて、（爺やさん、今ほどは難有う。其の厭なものゝ居た事を、通りが／＼りに知らして下すつたお方は、巖殿の方へおいでなすつたと云ふが、未だお歸りになつた様子はないかい。）  
ツて聞かした。

（どうだかね、私、内方へ参つたは些との間だし、雨に駈出しても來さつしやらねえもんだで、未だ歸らつしやらねえでござえませう。

それとも身輕でハイづん／＼行かつせえたもんだで、山越しに名越の方さ出さつしやつたかも知れましねえ、） 言うたらばの。

（お見上げ申したら、よくお禮を申して下さい

よ。） ツてよ。

其の溝さ飛越して、其路を、

垣の外の此方と同一通筋。

「ハイぶうらり／＼、谷戸の方へ、行かしつけ

え。」

と言ひかけて身體ごと、此の巖殿から檣原へ出口の方へ振向いた。身の舉動が仰山で、然も用ありげな素振たつたので、散策子もおなじく其方を。

歸途の渠には恰も前途に當る。

「それ見えるでがさ。の、彼處さ土手の上にござらつしやる。」

錦の帯を解いた様な、媚めかしい草の上、雨のあの薄霞、山の裾に靉靄く中に一張の紫大ささ月輪の如く、はた葦の花束に似たるあり。紫羅傘と書いていちのはちの花、字の通りだと、それ美人の持物。

散策子は一目見て、早く既に其の霞の端の、ひた

／＼と來て膚に絡ふのを覺えた。

彼處と此方と、言ひ知らぬ、春の景色の繋がる中へ、蕨のやうな親仁の手、無骨な指で指して、  
「彼處さ、それ、傘の陰に憩んでござる。はゝはゝ、禮を聞かつせえ、待つてるだに。」

二十六

横に落した紫の傘には、あの紫苑に來る、黄金色の昆蟲の翼の如き、煌々した日の光が射込んで、草に輝くばかりに見える。

其の蔭から、しなやかな裳が、土手の翠を左右へ

残<sup>のこ</sup>して、線<sup>せん</sup>もなしに、よろけ縞<sup>じま</sup>のお召<sup>めし</sup>縮<sup>ちり</sup>緬<sup>めん</sup>で、嬌<sup>しな</sup>態<sup>な</sup>よく仕<sup>し</sup>切<sup>き</sup>つたが、油<sup>あぶら</sup>のやうにとりとした、雨<sup>あめ</sup>のあとの路<sup>みち</sup>との間<sup>あいだ</sup>、あるかなしに、細<sup>ほそ</sup>い襖<sup>つまさき</sup>先<sup>さき</sup>が柔<sup>やほら</sup>かくしつとりと、内<sup>うち</sup>端<sup>は</sup>に搔<sup>かい</sup>込<sup>こ</sup>んだ足<sup>た</sup>袋<sup>び</sup>で留<sup>と</sup>まつて、其<sup>そ</sup>處<sup>こ</sup>から襦<sup>じゆ</sup>袷<sup>はん</sup>の友<sup>い</sup>染<sup>うぜん</sup>が、豊<sup>ゆた</sup>かに膝<sup>ひざ</sup>まで捌<sup>さば</sup>かれた。雪<sup>せつ</sup>駄<sup>た</sup>は一<sup>い</sup>ツ土<sup>つち</sup>に脱<sup>ぬ</sup>いで、片<sup>かた</sup>足<sup>あし</sup>はしなやかに、草<sup>くさ</sup>に曲<sup>ま</sup>げて居<sup>あ</sup>るのである。

前<sup>まへ</sup>を通<sup>とほ</sup>らうとして、我<sup>われ</sup>にもあらず立<sup>たち</sup>淀<sup>よど</sup>んだ。散<sup>さん</sup>策<sup>さく</sup>子は、下<sup>げ</sup>衆<sup>しゆう</sup>儕<sup>ばら</sup>と賭<sup>か</sup>物<sup>もの</sup>して、鬼<sup>おに</sup>が<sup>で</sup>出<sup>で</sup>る宇<sup>う</sup>治<sup>ぢ</sup>橋<sup>ばし</sup>の夕<sup>ゆ</sup>暮<sup>ふくれ</sup>を、唯一<sup>た</sup>騎<sup>き</sup>、東<sup>ひがし</sup>へ打<sup>う</sup>たする思<sup>おも</sup>ひがした。

恚<sup>か</sup>く近<sup>ちか</sup>づいた聲<sup>あしおと</sup>音<sup>ね</sup>は、件<sup>くだん</sup>の紫<sup>むらさき</sup>の傘<sup>かさ</sup>を小<sup>こ</sup>楯<sup>たて</sup>に、土<sup>ど</sup>手<sup>て</sup>へかけて悠<sup>い</sup>然<sup>ぜん</sup>と臆<sup>おぼろげ</sup>に投<sup>な</sup>げた、艶<sup>えん</sup>にして凄<sup>すこ</sup>い緋<sup>ひ</sup>の袴<sup>はかま</sup>に、小<sup>さ</sup>波<sup>なみ</sup>寄<sup>よ</sup>する微<sup>かすか</sup>な響<sup>ひび</sup>きさへ與<sup>あた</sup>へなかつたにもかゝらはらず、此<sup>こ</sup>方<sup>なた</sup>は一<sup>い</sup>ツ胸<sup>どう</sup>震<sup>ぶる</sup>ひをして、立<sup>たち</sup>直<sup>なほ</sup>つて、我<sup>われ</sup>知<sup>し</sup>らず肩<sup>かた</sup>を聳<sup>そび</sup>やかすと、杖<sup>ステッキ</sup>をぐいと振<sup>ふ</sup>つて、九<sup>じ</sup>字<sup>じ</sup>を切<sup>き</sup>りかけて、束<sup>つか</sup>々<sup>／＼</sup>と通<sup>とほ</sup>つた。

路<sup>みち</sup>は、あはれ、鬼<sup>おに</sup>の脱<sup>ぬ</sup>いだ其<sup>そ</sup>の脊<sup>つ</sup>を跨<sup>また</sup>がねばならぬほど狭<sup>せま</sup>いので、心<sup>こゝろ</sup>から、一<sup>い</sup>方<sup>ほう</sup>は海<sup>うみ</sup>の方<sup>ほう</sup>へ、一<sup>い</sup>方<sup>ほう</sup>は

檀原の山里へ、一方は來し方の巖殿になる、久能谷の此の出口は、恰も、ものゝ撞木の形。前は、一面の麥島。

正面に、青麥に對した時、散策子の面は恰も酔へるが如きものであつた。

南無三寶聲がかゝつた。それ、言はぬことではない。

「一散に遁げもならず、立停まつた渠は、馬の尾に油を塗つて置いて、驚掴みの掌を、迂り抜けなんだを口惜く思つたらう。」

「私。」  
と振返つて、

「ですかい、」と言ひつゝ一目見たのは、頭禿に齒豁なるものではなく、日の光射す紫のかけを籠めた俤は、几帳に宿る月の影、雲の鬢、簪の星、丹

花の脣、芙蓉の眦、柳の腰を草に縋つて、鼓草の花に浮べる状、虚空にかゝつた装である。

白魚のやうな指が、一寸、紫紺の半襟を引き合はせると、美しい瞳が動いて、

「失禮を  
と唯莞爾する。」

「はあ、」と言つた切、腰のまはり、遁げ路を見て置くのである。

「貴下お呼び留め申しまして、」  
とふつくりとした胸を上げると、やゝ凭れかゝつて土手に寝るやうにして居た姿を前へ。

「はあ、何、」

眞正直な顔をして、

「私ですか、」と空とぼける。

「貴下のやうなお姿だ、と聞きましてございます。」

先刻は、眞に御心配下さいまして、

徐ら、雪のやうな白足袋で、脱ぎ棄てた雪駄を引寄せた時、友染は一層はら／＼と、模様の花が俤に立つて、ぱツと留南奇の薰がする。

美女は立直つて、

「お蔭様で災難を、」  
と襟首を見せてつむりを下げた。

爾時獨 武者、杖をわきばさみ、兜を脱いで、

「え、何んですかな、」  
と曖昧。

美女は親しげに笑ひかけて、

「ほ、私は最う災難と申します。災難ですわ、貴下。彼が座敷へでも入りますか、知らないで居て御覽なさいまし、當分家を明渡して、何處かへ参らなければなりませんの。眞個に然うになりましたら、どうしませう。お庇様で助りましたてございますよ。難有う存じます。」

「それにしても、私と極めたのは、」

と思ふことが思はず口へ出た。

「是は些と調子はづれたつたので、聞き返すやうに、  
「え、」

二十七

「先刻の、あの青大將の事なんでせう。それにしても、よく私だと云ふのが分かりましたね、驚きました。」

「と棄鞭の遁構へで、駒の頭を立直すと、なほ打笑み、

「そりや知れますわ。こんな田舎ですもの。而し

て御覽の通り、人通りのない處ぢやありませんか。  
貴下のやうな方の出入は、今朝ツからお一人しか  
ありませんもの。丁と存じて居りますよ。」

「では、あの爺さんにお聞きなすつて、」

「否、私ども石垣の前をお通りがりの時、二階  
から拜みました。」

「ぢやあ、私が青大將を見た時に、」

「貴下のお姿が楯におなり下さいましたから、爾  
時も、厭なものを見ないで済みました。」  
と少し打傾いて懐しさう。

「ですが、貴女、」とうつかりいふ、

「はい？」

と促かすやうに言ひかけられて、ハタと行詰つた  
らしく、杖をコツ／＼と瞬一ツ、脣を引緊めた。

追っかけて、

「何んでございますか、聞かして頂戴。」  
と婉然とする。

慌て氣味に狼狽つきながら、

「貴女は、貴女は氣分が悪くつで寝ていらつしやるんだ、と云ふぢやありませんか。」

「あら、こんなに甲羅を干して居りますものを。」

「へい、」と、綱は目をニツて、あゝ我ながらまづいことを言つた顔色。

美女は其の顔を差覗く風情して、瞳を斜めに衝と流しながら、華奢な掌を軽く頬に當てると、紅がひらりと搦む、腕の雪を拂ふ音、さら／＼と衣摺れして、

「眞個は、寝て居ましたの」

「何んですツて、」  
と苦笑。

「でも爾時は寝て居やしませんの。貴下起きて居たんですよ。あら、」

と稍調子高に、  
「何を言つてるんだか分らないわねえ。」

馴々しく云ふと、急に胸を反らして、すつきりとした耳許を見せながら、顔を反向けて俯向いたが、其まゝ身體の平均を保つやうに、片足をうしろへ引いて、立直つて、

「否、寝て居たんぢやなかつたんですけども、貴下のお姿を拜みますと、急に心持が悪くなつて、それから寢たんです。」

「これは酷い、酷いよ、貴女は。」  
棄て身に衝と寄り進んで、

「ぢや青大將の方が増だつたんだ。だのに、態々呼留めて、災難を免れたとまで事を誇大にして、禮なんぞおつしやつて、元來、私は餘計なお世話だと思つて、御婦人ばかりの御住居だと聞いたにつけても、愈々極が悪くつて、此處だつて、貴女、こそゝ遁げて通らうとしたんぢやありませんか。それを大袈裟に禮を言つて、極を悪がらせた上に、姿とは何事です。幽霊ぢやあるまいし、心持を悪くする姿と云ふがありますか。圖體とか、状とか云ふものですよ。其の私の圖體を見て、心持が悪くなつたは些と烈しい。それがために寢たは、殘酷ぢやありません

んか。

要らんおせつかいを申上げたのが、見苦しかったら然うおつしやい。此お關所をあやまつて通して頂<sup>いたゞ</sup>く。――勸進帳でも讀みませうか。それでいけなけりや仕方がない。元の巖殿へ引返して、山越で出<sup>しゆつ</sup>奔する分の事です。――

と逆寄せの決心で、然う言つたのをキツカケに、どかと土手の草へ腰をかけたつもり<sup>とこ</sup>の處、負けまい氣の、魔ものゝ顔を見詰めて居たので、横ざまに落<sup>おと</sup>しつける筈の腰が据らず、床凡を、這つて、ずるりと大地へ。

「あら、お危い。――」  
と云ふが早いか、眩いばかり目の前へ、霞を抜けた極彩色。さそくに友染の膝を亂して、繕ひもなくはらりと折敷き、片手が踏み抜いた下駄一ツ前壺を押し寄越すと、扶け起すつもりであらう、片手が薄色の手巾ごと、ひらめいて芬と薰つて、優しく男の背にかゝつた。

南無観世音大菩薩

助けさせたまへと、

散策子は心の裏、陣備も身構もこれにて粉になる。

「お足袋が泥だらけになりました、直き其處でござんすから、一寸おいすがせ申しませう。お脱ぎ遊ばせな。」

と指をかけようとする爪尖を、慌しく引込ませるを拍子に體を引いて、今度は大丈夫に、背中を土手へ寝るばかり、ばたりと腰を懸ける。暖い草が、ちりげもとで赫とほてつて、汗びつしより、まつかな顔をして且つ目をきよろつかせながら、

「構はんです、横はんです、こんな足袋なんぞ。」

ヤレ又落語の前座が言ひさうなことを、とヒヤリとして、漸と瞳を定めて見ると、美女は勿飛んだ杖を拾つて、しなやかに両手でついて、悠々と立つて居る。

羽織なしの引かけ帯、ゆるやかな袷の着こなしが、

いまの身じろぎで、片前下りに友染の紅匂ひこぼれて、水色縮緬の扱帯の端、やゝずり下つた風情さへ、杖には似合はないだけ、恰も人質に取られた形――可哀や、お主の身がはりに、戀の重荷でへし折れよう。

「眞個に濟みませんでした。」

又候先を越して、

「私、どうしたら可いでせう。」

と思ひ案ずる目を半ば閉ぢて、屈託らしく、盲目が歎息をするやうに、ものあはれな装して、

「うっかり飛んだ事を申上げて、私、そんなつもりで言つたんぢやありませんわ。」

< Ruby > 貴下のお姿を見て、それから心持が悪くなりましたつて、言通りの事が、もし眞個なら、どうして口へ出して言へますもんですか。貴下のお姿を見て、それから心持が悪く

再び口の裏で繰返して見て、

「おほゝ、まあ、大概お察し遊ばして下さいますなね。」と樂にさし寄つて、袖を土手へ敷いて凭

れるやうにして並べた。春の草は、其肩あたりを翠に仕切つて、二人の裾は、足許なる麥畠に臨んだのである。

「然う云ふつもりで申上げたんでござんせんことは、よく分つてますぢやありませんか。」

「はい、」

「ね、貴下、」

「はい、」

と無意味に合點して頷くと、未だ心が濟まぬらしく、

「言とがめをなすつてさ、眞個にお人が悪いよ。」  
と異に搦む。

聊か辯ぜざるべからず、と横に見向いて、  
「人の悪いのは貴女でせう。私は何も言とがめなぞした覚えはない。心持が悪いとおつしやるからおつしやる通りに伺ひました。」

「そして、腹をお立てなすつたんですもの。」  
「否、恐縮をしたまでです。」

「其處は貴下、お察し遊ばして下さる處ぢやありませんか。」

言の綾もございますわ。朝顔の葉を御覽なさいまし、表はあんなに薄つぺらなもんですが、裏はふつくりして居りますもの  
裏を聞いて下さい

よ。」

「裏だと お待ちなさいよ。」

え、といきつぎに目を瞑つて、仰向いて一呼吸について、

「心持が悪くなつた反對なんだから、私の姿を見ると、それから心持が善くなつた。――事になると、――可い加減になさい、馬鹿になすつて、――と極めつける。但し笑ひながら。」

清しい目で屹と見て、

「むづかしいのね？ どう言へば恚うおつしやつて、貴下、弱いものをおいぢめ遊ばすもんぢやないわ。私は煩つて居るんぢやありませんか。」

草に手をついて膝をずらし、

「お聞きなさいましよ、まあ、」  
と恍惚うつとりしたやうに笑えみを含ふくむ口許くちもとは、鐵漿かねをつけて  
居ゐはしまいかと思おもはれるほど、婀娜あなだめいたものであ  
つた。

「まあ、私わたしに、戀こひしい懷なつかしい方かたがあるとしませう  
ね。可ようござんすか

二十九

「戀こひしい懷なつかしい方かたがあつて、そしてどうしても逢あ  
へないで、夜よるも寐ねられないほどに思おもひ詰つめて、心こゝろも  
亂みだれゝば氣きも狂くるひさうになつて居をりますものが、せ  
めて肖にたお方かたでもと思おもふのに、此頃このころは恚かうやつて此こ

處等には東京からおいでなすつたらしいのも見えません處へ、何年ぶりか、幾月越か、フト然うらしい、肖た姿をお見受け申したとしましたら、貴下、  
と手許に丈のびた影のある、土筆の根を摘み試み、

「爾時は、而して何んですか、切なく

つて、あとで臥つたと申しますのに、爾時は、どんな心持でと言つて可いのでございませうね。

矢張、あの、厭な心持になつて、と云ふほかはないではありませんか。それを申したんでございますよ。  
「

一言もなく、しばらくして、

「ぢや、然う云ふ方がおあんなさるんですね、  
と僅に一方へ切抜けようとした。

「御存じの癖に。」

と、伏兵大いに起る。

「え、」

「御存じの癖に。」

「今お目にかゝつたばかり、お名も何も存じませ

んのに、どうしてそんな事が分ります。」

うたゝ寐に戀しき人を見てしより、其の、みを、  
と云ふ名も知らぬではなかつたけれども、夢のいは  
れも聞きたさに。

「それでも、私が氣疾をして居ります事を御存じ  
のやうでしたわ。先刻、」

「それは、何、あの畑打ちの爺さんが、蛇をつか  
まへに行つた時に、貴女はお二階に、と言つて、一  
寸御様子を漏らしたゞけです。それも唯御氣分が悪  
いだけ。」

私の形を見て、お心持が悪くなつたなんぞつて事  
は、些とも話しませんから、知らう道理はないので  
す。但禮をおつしやるかも知れんと云ふから、其奴  
は困つたと思ひましたけれども、此處を通らないぢ  
や歸られませんか。恚うと分つたら穴へ  
でも入るんだつて。お目にかゝるのぢやなかつたん  
です。しかし私が知らないで、二階から御覽なすつ

たゞけは、そりや仕方がない。」

「まだ、あんな事をおつしやるよ。然うお疑ひなさるんなら申しませう。貴下、此のまあ麗かな、樹も、草も、血があれば湧くんでせう。朱の色した日の光にほか／＼と、土も人膚のやうに暖うござんす。竹があつても暗くなく、花に陰もありません。燃えるやうにちら／＼咲いて、水へ散つても朱塗の杯になつてゆる／＼流れませう。海も眞蒼な酒のやうで、空は、」

と白い掌を、膝に仰向けて打仰ぎ、  
「緑の油のやう。とろ／＼と、曇もないのに淀んで居て、夢を見ないかと勧めるやうですわ。山の形も柔かな天鵝絨の、ふつくりした括枕に似て居ます。其方此方陽炎や、絲遊がたきしめた濃いたきものゝやいうに靡くでせう。雲雀は鳴かうとして居るんでせう。鷺が、遠くの方で、低い處で、此方にも里がある、楽しいよ、と鳴いて居ます。何不足のない、申分のない、目を瞑れば直ぐにうと／＼と夢を見ますやうな、此の春の日中なんでございませうがね、貴下、これをどうお考へなさいませうえ。」

「どうと言つて、」  
「と言に連れられた春の其の日中から、瞳を美女の  
姿にかへした。」

「貴下は、どんなお心持がなさいますえ、」

「お楽しみですか。」

「はあ、」

「お嬉しうございますか。」

「はあ、」

「お賑かでございますか。」

「貴女は？」

「私は心持が悪いんでございます、丁ど貴下のお  
姿を拜みました時のやうに、」

「と言ひかけて吻と小さなとき、人質の彼の杖を、  
斜めに両手で膝へ取つた。情の海に棹す姿。思はず  
腕組をして熟と見る。」

「此の春の日の日中の心持を申しますのは、夢をお話するやうで、何んとも口へ出しては言へませぬのね。何うでせう、此のしんとして寂しいことは矢張、夢に賑かな處を見るやうではござんすまいか。二歳か三歳ぐらゐの時に、乳母の背中から見ました、祭禮の町のやうにも思はれます。

何爲か、秋の暮より今、此の方が心細いんですもの。それで居て汗が出ます、汗ぢやなくつて慥う、あの、暖かさで、心を絞り出されるやうですわ。苦しくもなく、切なくもなく、血を絞られるやうですわ。桑かな木の葉の尖で、骨を抜かれますやうではございませんか。こんな時には、肌が蕩けるのだつて言ひますが、私は何んだか、水になつて、其の溶けるのが消えて行きさうで涙が出ます、涙だつて、悲しいんぢやありません、然うかと言つて嬉しいんでもありません。

あの貴下、叱られて出る涙と慰められて出る涙と

ござんすのね。此の春の日に出来ますのは、其の慰め  
られて泣くんです。矢張悲しいんでせうかねえ。お  
なじ寂しさでも、秋の暮のは自然が寂しいので、春  
の日の寂しいのは、人が寂しいのではありませんか。

あゝ遣つて、田圃にちらほら見えます人も、秋の  
だと、しつかりして、てん／＼が景色の寂しさに  
負けないやうに、張合を持つて居るんでせう。見た  
處でも、しよんぼりした脚にも氣が入つて居るやう  
ですけど、今しがたは、すつかり魂を抜き取られ  
て、ふは／＼浮き上つて、あのまゝ、鳥か、蝶々に  
でもなりさうですね。心細いやうですね。

暖い、優しい、柔かな、すなほな風にさそはれて、  
鼓草の花が、ふつと、綿になつて消えるやうに魂が  
なりさうなんですもの。極樂と云ふものが、アノ確  
に目に見えて、而して死んで行くと同一心持なんで  
せう。

楽しいと知りつゝも、情ない、心細い、頼りのな  
い、悲しい事なんぢやありませんか。

而して涙が出ますのは、悲しくつて泣くんでせうか、甘えて泣くんでせうかねえ。

私はずた／＼に切られるやうで、胸を掻きむしられるやうで、そしてそれが痛くも痒くもなく、日當りへ桃の花が、はら／＼とこぼれるやうで、長閑で、麗で、美しくつて、其れで居て寂しくつて、雲のない空が頼りのないやうで、緑の野が砂原のやうで、前生の事のやうで、目の前の事のやうで、心の内が言ひたくつて、言はれなくつて、焦つたくつて、口惜くつて、いら／＼して、じり／＼して、其くせばツとして、うつとり地の底へ引込まれると申しますより、空へ抱き上げられる鹽梅の、何んとも言へない心持がして、それで寝ましたんですが、貴下、

小雨が晴れて日の照るやう、忽ち麗なおも／＼ちして、

「恚う申しても矢張お氣に障りますか。貴下のお姿を見て、心持が悪くなつたと言ひましたのを、未だ許しちや下さいませんか、おや、貴下何うなさいましたの。」

身動きもせず聞き澄んだ散策子の茫然とした目の前へ、紅白粉の烈しい流が眩い日の光で渦いて、くる／＼と廻つて居た。

「何んだか、私も變な心持になりました、あゝ、と掌で目を拂つて、

「で、其處でお休みになつて、

「はあ、」

「夢でも御覽になりましたか。」

思はず口へ出したが、言ひ直した、餘り唐突と心付いて、

「然う云ふお心持でうたゝ寐でもしましたら、どんな夢を見るでせうな。」

「矢張、貴下のお姿を見ますわ。」

「えゝ、」

「此處に恚うやつて居りますやうな。ほゝほゝ。と言ひ知らずあでやかなものである。」

「いや、串戯はよして、其の貴女、戀しい、慕は

しい、而してど、うしても、最う逢へない、とお言ひなすつた、其の方の事を御覽なさるでせうね。」

「其の貴下に肖た、」

「否さ、」

此處で顔を見合はせて、二人とも筆つて居た草を同時に棄てた。

「成程。寂としたもんですね、どうでせう、此の閑さは」

頂の松の中では、頻に目白が轉るのである。

「又此の檜原と云ふんですか、山の裾がすく／＼出張つて、大きな怪物の土地の神が海の方へ向つて、天地に開いた口の、奥歯へ苗代田麥畠などを、引銜へた形に見えます。谷戸の方は、恚う見た處、何んの影もなく、春の日が行渡つて、些と曇があればそれが霞のやうな、長閑な景色で居ながら、何んだか厭な心持の處ですね。」

美女は身を震はして、何故か嬉しさうに、

「あゝ、貴下も其の（厭な心持）をおつしやいましたよ。ぢや、もう私も其のお話をいたしましても差支へございませんのね。」

「可うございます。はゝゝはゝ。」

ト一寸更まつた容子をして、うしろ見られる趣で、其二階家の前から路が一畝り、矮い藁屋の、屋根にも葉にも一面の、椿の花の紅の中へ入つて、菜畠へ纔に顯れ、苗代田で又絶えて、遙かに山の裾の翠に添うて、濁つた灰汁の色をなして、ゆつたりと向うへ通じて、左右から突出た山でとまる。檜原の奥深く、蒸し上るやうに低く霞の立つあたり、背中合せ

が停車場で、其の腹へ笛太鼓の、異様に響く音を籠めた。其處へ、遙かに瞳を通して、しばらく茫然とした風情であつた。

「然うですねえ、はじめは、まあ、心持、彼の邊からだらうと思ふんですわ、聲が聞えて來ましたのは、」

「何んの聲です？」

「はあ、私が臥りまして、枕に髪をこすりつけて、悶えて、あせつて、焦れて、つく／＼、口惜くつて、情なくつて、身がしびれるやうな、骨が溶けるやいな、心持で居た時でした。先刻の、あの雨の音、さあつと他愛なく軒へかゝつて通りましたのが、丁ど彼處あたりから降り出して來たやうに、寝て居て思はれたのでございます。

あの停車場の囃子の音に、何時か氣を取られて居て、それだからでせう。今でも停車場の人ごみの上へだけは、細い雨がゝゝつて居るやうに思はれます

もの。未だ何處にか雨氣が残つて居りますなら、向うの霞の中でせうと思ひますよ。

と、其細い、幽な、空を通るかと思ふ雨の中に、圖太い、底力のある、そして、さびのついた鹽辛聲を、腹の底から押出して、

(えゝ、えゝ、えゝ、伺ひます。お話はお馴染の東 京世渡草、商人の假聲物眞似。先づ神田邊の事でございますして、えゝ、大家の店前にござります。夜のしら／＼明けに、小僧さんが門口を掃いて居りますと、納豆、納豆ーー  
と申して、情ない調子になつて、

(えゝ、お御酒を頂きましたして聲が續きません、助けて遣つておくんなさい。)  
と厭な聲が、流れ星のやうに、尾を曳いて響くんでございますの。

私は何んですか、悚然として寢床に足を縮めました。しばらくして、又其の (えゝ、えゝ、) と

云ふ變な聲が聞えるんです。今度は些と近くなつて。

それから段々あの榎原の家を向ひ合ひに、飛び／＼に、千鳥にかけて一軒一軒、何處でもおなじことを同一ところまで言つて、お錢をねだりませんでございませがね、暖い、ねんばりした雨も、其の門附の足と一緒に、向うへ寄つたり、此方へよつたり、ゆる／＼歩行いて來ますやうです。

其の納豆納豆　　ー　　と云ふのだの、東京と云ふのですの、店前だの、小僧が門口を掃いて居る處だと申しますのが、何んだか懐しい、兩親の事や、生れました處なんぞ、昔が思ひ出されまして、身體を煮られるやうな心持がして我慢が出来ないで、搔卷の襟へ喰ひついて、しつかり胸を抱いて、そして恍惚となつて居りますと、やがて、些と強く雨が來て當ります時、内の門へ參つたのでございます。

(えゝ、えゝ、えゝ、)

と言ひ出すぢやございませんか。

(お話は、お馴染みの東京世渡草、商人の假聲物真似。先づ神田邊の事でござりまして、え、え、大家の店さきでござります。夜のしら／＼あけに、小僧さんが門口を掃いて居りますと、納豆納豆　――)

とだけ申して、

(え、え、お御酒を頂きまして聲が續きません、助けて遣つておくんなさい。)

と一分一厘おなじことを、おなじ調子で云ふんですもの。私の門へ來ましたまでに、遠くから丁ど十三度聞いたのでございます。」

「女中が直ぐに出なかつたんです。」

（ねえ、助けておくんないな、お御酒を頂いたもんだからね、聲が續かねえんで、えへ、えへ、）  
厭な咳なんぞして、

（遣つておくんないよ、飲み過ぎて切ねえんで、助けておくんない、お願いだ。）

と言つて獨言のやうに、貴下、

（遣り切ねえや、）ツて、いけ太々しい容子つたらないんですもの。其處らへ、ベツベツ唾をしつけて居さうですわ。

小錢の音をちやら／＼とさして、女中が出さうにしましたから、

（光かい、光や、）

と呼んで、二階の上り口へ來ましたのを、押留めるやうに、床の中から、

（何んだね、）

と自分でも些と尖々しく言つたんです。

（門附でございます。）

（藝人かい！）

(はい、)  
ツて吃驚して居ました。

(不可いよ、遣つちや不可ない。

藝人なら藝人らしく藝をして錢をお取り、と然う  
お言ひ。出来ないなら出来ないと言つて乞食をおし。  
なぜ又自分の藝が出来ないほど酒を呑んだ、と言つ  
てお遣り。いけ酒亞々々失禮ぢやないか。)

とむら／＼として、どうしたんですか、じり／＼  
胸が煮え返るやうで極めつけますと、竊と跽音を忍  
んで、光やは、二階を下りましたつけ。

お恥しうございますわ。

甲高かつたさうで、よく下まで聞えたと見えます。  
表二階に居たんですから。

(何んだつて、)  
と門口で喰つてかゝるやうな聲がしました。

枕をおさへて起上りますと、女中の聲で、御病氣

なんだからと、こそ／＼云ふのが聞えました。

嘲るやうに、

（病人なら病人らしく死ん了へ。治るもんなら治つたら可からう。何んだつて愚圖ついて、煩つて居るんだ。）

と赭顔なのが白い齒を剥き出して云ふやうです。

はあ、そんな心持がしましたの。

（おほ、死んで見せようか、死ぬのが何も、）

とつゝと立つと、ふら／＼して床を放れて倒れました。段へ、裾を投げ出して、欄干につかまつた時、雨がさつと暗くなつて、私はひとりで泣いたんです。其れツ切、聲も聞えなくなつて、門附は何處へ参りましたか。雨も上つて、又明日日が當りました。何んですかねえ、十文字に小兒を引背負つて跣足で歩いて居る、四十恰好の、巖乗な、繪に描いた、赤鬼と言つた形のものゝやうに、今恚うやつてお話をします内も考へられます。女中に聞いたのでもございませんにー

又最<sup>また</sup>う寢<sup>ね</sup>床<sup>どこ</sup>へ倒<sup>たふ</sup>れツ切<sup>きり</sup>になりませうかとも存<sup>ぞん</sup>じま  
したけれども、然<sup>さ</sup>うしたら氣<sup>き</sup>でも違<sup>ちが</sup>ひさうですから、  
ぶら／＼日<sup>ひ</sup>向<sup>なた</sup>へ出<sup>で</sup>て來<sup>き</sup>たんでございます。

否<sup>い</sup>え、はじめてお目<sup>め</sup>にかゝりました貴<sup>あなた</sup>下<sup>た</sup>に、こんな  
お話<sup>はなし</sup>を申<sup>ま</sup>上<sup>し</sup>げまして、最<sup>も</sup>う氣<sup>き</sup>が違<sup>ちが</sup>つて居<sup>を</sup>りますのか  
も分<sup>わか</sup>りませんが、  
と言<sup>い</sup>ひかけて、心<sup>こころ</sup>を籠<sup>こ</sup>めて見<sup>み</sup>詰<sup>つ</sup>めたらしい、目<sup>め</sup>の  
色<sup>いろ</sup>は美<sup>うつく</sup>しかつた。

「貴<sup>あなた</sup>下<sup>た</sup>、眞<sup>ほん</sup>個<sup>とう</sup>に未<sup>み</sup>來<sup>らい</sup>と云<sup>い</sup>ふものはありますもので  
ございませうか知<sup>し</sup>ら。」

「もしあるものと極<sup>きま</sup>りますなら、地<sup>ぢ</sup>獄<sup>じく</sup>でも極<sup>ごく</sup>樂<sup>らく</sup>で  
も構<sup>かま</sup>ひません。逢<sup>あ</sup>ひたい人<sup>ひと</sup>が其<sup>そこ</sup>處<sup>こ</sup>に居<sup>ゐ</sup>るんなら。さ  
つさと其<sup>そ</sup>處<sup>こ</sup>へ行<sup>ゆ</sup>けば宜<sup>よろ</sup>しいんですけれども、  
と土<sup>つ</sup>筆<sup>くし</sup>のたけの指<sup>ゆび</sup>白<sup>しろ</sup>う、又<sup>また</sup>うつゝなげに草<sup>くさ</sup>を摘<sup>つ</sup>み、

摘<sup>つ</sup>み、

「屹<sup>きつ</sup>と然<sup>さ</sup>うと極<sup>きま</sup>りませんから、もしか、死<sup>し</sup>んで其<sup>そ</sup>

れつ切りになつては情ないんですもの。其くらゐな  
ら、生きて居て思ひ惱んで、煩らつて、段々消えて  
行きます方が、幾干が増だと思ひます。忘れな  
い時までも、何時までも、  
と言ひ／＼抜き取つた草の葉をキリ／＼と白歯で  
噛んだ。

トタンに慌しく、男の膝越に衝とのばした袖の色  
も、帯の影も、緑の中に濃くなつて、活々として蓮  
葉なものいひ。

「いけないわ、人の悪い。」  
散策子は答へに窮して、實は草の上に位置も構は  
ず投出された、オリイブ色の上表紙に、とき色のリ  
ボンで封のある、ノオトブツクを、つまさぐつて居  
たのを見たので。

「此方へ下さいよ、厭ですよ。」

と端へかけた手を手帳に控へて、麥畠へ眞正面。

話をわきへずらさうと、青天白日に身構へつゝ、

「歌がお出来なさいましたか。」

「ほゝほゝ、」

と唯笑ふ。

「繪をお描きになるんですか。」

「ほゝほゝ。」

「結構ですな、お楽しみですね、些と拜見いたしたいもんです。」

手を放したが、附着いた肩も退けないで、

「お見せ申しませうかね。」

あどけない状で笑ひながら、持直してぱら／＼と男の帯のあたりへ開く。手帳の枚頁は、此の人の手に恰も蝶の翼を重ねたやうであつたが、鉛筆で描いたのは

ひとめみ  
一目見て散策子は蒼くなつた。

だいせうのうはくらんざつ  
大小濃薄亂雑に、半ばかきさしたのもあり、歪ん  
だのもあり、震へたのもあり、やめたのもあるが、  
とばかり。

「ね、上手でせう。此處等の人は、貴下、玉脇  
では、繪を描くと申しますとさ。此の土手へ出ちや、  
何時までも恚うして居ますのに、唯居ては、谷戸口  
の番人のやうでをかしうござんすから、いつかつか  
らはじめたんですわ。

たいそうひやうばん  
大層評判が宜しうございますから  
何で  
すよ、此頃に繪具を持出して、草の上で風流の店び  
らきをしようと思ひます、大した寫生ぢやありませんか。

この圓いのが海、此の三角が山、此の四角いのが  
田圃だと思へばそれでもようござんす。それから  
い顔にして、い胴にしてに坐つて居る、今戸焼  
の姉様だと思へばそれでも可うございます、袴を穿

いた殿様だと思へばそれでも可いでせう。

それから 水中に物あり、筆者に問へば  
知らずと答ふと、高慢な顔色をしても可いんですし、  
名を知らない死んだ人の戒名だと思つて拜んでも可  
いんですよ。」

やう／＼聲が出て、

「戒名、」

と口が利ける。

「何、何んと云ふんです。」

「四角院圓々三角居士」と、

いひながら土手に胸をつけて、袖を草に、太脛の  
あたりまで、友染を敷亂して、すらりと片足片襪を  
泳がせながら、かう内へ掻込むやうにして、鉛筆で  
すら／＼と其の三體の祕密を記した。

テン／＼カラ、テンカラと、耳許に太鼓の音。二  
人の外に人のない世ではない。アノ椿の、燃え落ち

るやうに、向うの茅屋へ、續いてぼた／＼と溢れた  
と思ふと、菜種の路を葉がくれに、眞黄色な花の上  
へ、ひらりと彩つて出たものがある。

茅屋の軒へ、鶏が二羽舞上つたのかと思つた。

二個の頭、獅子頭、高いのと低いのと、後になり  
先になり、纏れる、狂ふ、花すれ、葉すれ、菜種に、  
と見るとやがて、足許から其方へ續く青麥の畠の端、  
玉脇の門の前へ、出て來た連獅子。

汚れた萌黄の裁着に、泥草鞋の乾いた埃も、霞が  
麥にかゝるやう、志して何處へ行く。早其の太鼓を  
打留めて、急足に近づいた。いづれも獅子の角兵  
衛大小。小さい方は八ツばかり、上は十三一  
四と見えたが、すぐに久能谷の出口を突切り、紅白  
の牡丹の花、はつと俤に立つばかり、ひらりと前を  
行き過ぎる。

「お待ち一寸、」

と聲をかけて美女は起直つた。今の姿を其のまゝ

に、雪駄は獅子の蝶に飛ばして、土手の草に横坐りになる。

ト獅子は紅の切を捌いて、二つとも、立つて頭を向けた。

「あゝ、あの、兒たち、お待ちなね。」

テン／＼／＼、（大きい方が）トンと當てる  
と、太鼓の面に撥が飛んで、ぶる／＼と細に躍る。

「アリヤ」

小獅子は路へ橋に反つた、のけ様の頭ふつくりと、  
二かには目に紅を潮して、口許の可愛らしい、色の白  
い兒であつた。

「おほゝゝ、大層勉強するわねえ、まあ、お待ちよ。あれさ、そんなに苦しい思ひをして引くりかへらなくつても可いんだよ、可いんだよ。」

と壓へつけるやうに云ふと、ぴよいと立直つて頭の堆く大きく突出た、紅の花の廂の下に、くるツとした目を三つて立つた。

ブル／＼ツと、跡を引いて太鼓が止む。

美女は膝をずらしながら、帯に手をかけて、揺り上げたが、

「お待ちよ、今お錢を上るからね、」

手帳の紙へはしり書して、一枚手許へ引切つた、其のまゝ獅子をさし招いて、

「おいで／＼、あゝ、お前ね、これを持って、其の角の二階家へ行つて取つておいで。」

留守へ言ひつけた爲替と見える。

後馳せに散策子は袂へ手を突込んで、

「細いのならありますよ。」

「否、可うござんすよ、さあ、兄や、行つて来

な。

撥を片手で引つかむと、恐る／＼差出した手を素  
疾く引込め、とさかをはらりと振つて行く。

「さあ、お前此方へおいで、」

小さな方を膝許へ。

きよとんとして、ものも言はず、棒を呑んだ人形  
のやうな顔を、凝と見て、

「幾歳なの、」

「八歳でござえス。」

「母さんはないの、」

「角兵衛に、そんなものがあるもんか。」

「お前は知らないでもね、母様の方は知ってるか  
も知れないよ、」

と衝と手を袴越に白くかける、とぐいと引寄せて、  
横抱きに抱くと、獅子頭はぱくりと仰向けに地を拂  
つて、草鞋は高く反つた。鶏の羽の飾には、椰子の

葉を吹く風が渡る。

「貴下、」

と落着いて見返つて、

「私の兒かも知れないんですよ。」

トタンに、つるりと腕を這つて、獅子は、倒にト  
ンと返つて、ぶる／＼と身體をふつたが、けるりと  
して突立つた。

「えへ／＼／＼、」

此處へ勢よく兄獅子が引返して、

「頂いたい、頂いたい。」

二つばかり天窓を掉つたが、小さい方の背中を突  
いて、テンと又撥を當てる。

「可いよ、そんなことをしなくつても、」

と裳をずりおろすやうにして止めた顔と、未だ掴  
んだまゝの大きな銀貨とを互に見較べ、二個ともとば  
んとする。時に朱盆の口を開いて、眼を輝すものは

何。<sup>なに</sup>

「其のかはり、ことづけたいものがあるんだよ、  
待つておくれ。」

と其の口を樂書の餘白へ、鉛筆を眞直に取つ  
てすら／＼と春の水の靡くさまに走らした假名は、  
かくれもなく、散策子に讀得られた。

君とまたみるめおひせば四方の海の

水の底をもかつき見てまし

散策子は思はず海の方を屹と見た。波は平かであ  
る。青麥につゞく紺青の、水平線上雪一山。

富士の影が渚を打つて、ひた／＼と薄く被さる、  
藍色の西洋館の棟高く、二三羽鳩が羽をのして、ゆ  
るく手巾を掉り動かす状であつた。

小さく疊んで、幼い方の手に其の（ことづけ）  
を渡すと、ふツくりした頤で、合點々々をすると  
見えたが、いきなり二階家の方へ行かうとした。

使を頼まれたと思つたらしい。

「おい、其方へ行くんぢやない。」  
と立入つたが聲を懸けた。

美女は莞爾して、

「唯持つて行つてくれゝば可いの、何處へツて當  
はないの。落したら其處でよし、失くしたら其れツ  
切で可んだから  
唯心持だけなんだから

」

「ぢや、唯持つて行きや可いのかね、奥さん、」  
と聞いて頷くのを見て、年紀上だけに心得顔で、  
危つかしさうに仰向いて吃驚した風で居る幼い方の、  
獅子頭を背後へ引いて、

「こん中へ入れとくだア、奴、大事にして持つと  
んねえよ。」

獅子が並んでお辭儀をすると、すた／＼と駈け出  
した。後白浪に海の方、紅の母衣翩翩として、青麥  
の根に霞み行く。

さて半時ばかりの後、散策士の姿は、一人、彼處から鳩の舞ふのを見た、濱邊の藍色の西洋館の傍な  
る、砂山の上に顕れた。

其處へ來ると、波打際までも行かないで、太く草  
臥れた状で、ぐツたりと先づ足を投げて腰を卸す。  
どれ、貴女のために（ことづけ）の行方を見届  
けませう。連獅子のあとを追つて、と云ふのをしほ  
に、未だ我儘が言ひ足りず、話相手の欲しかったら  
しい美女に辭して、袂を分つたが、獅子の飛ぶのに  
足の續くわけはない。

一先づ歸宅して寢轉ばうと思つたのであるが、久  
能谷を離れて街道を見ると、人の瀬を造つて、停車  
場へ押掛ける夥しさ。中には最う此處等から假聲を  
つかつて行く壯佼がある、淺黄の襦袢を膚脱で行く  
女房がある、其の演劇の恐しさ。大江山の段が何か  
知らず、逆も町へは寄附かれたものではない。

で、路と一緒に、人通の横を切つて、田圃を抜けて来たのである。

正面にくぎり正しい、雪白な霞を召した山の女王のましますばかり。見渡す限り海の色。濱に引上げた船や、畚や、馬秣のやうに散ばつたかじめの如き、いづれも海に對して、我は顔をするのではないから、固より馴れた目を遮りはせぬ。

且つ一人一人居なければ、眞晝の様な月夜とも想はれよう。長閑さはしかし野にも山にも増つて、あらゆる白砂の佛は、暖い霧に似て居る。

鳩は蒼空を舞ふのである。ゆつたりした浪にも誘はれず、風にも乗らず、同一處を――其の友は館の中に、こと／＼と塹を踏んで、くゝと啼く。

人は恚う云ふ處に、恚うして居ても、胸の雲霧の霽れぬ事は、寐られぬ衾と相違はない。

徒らに砂を握れば、くぼみもせず、高くもならず、

他愛なくほろ／＼と崩れると、又傍からもり添へる。  
水を掴むやうなもので、搜ればはら／＼とたゞ貝が  
出る。

渚には敷満ちたが、何んにも見えない處でも、纔  
に砂を分ければ貝がある。未だ此の他に、何が住ん  
で居ようも知れぬ。手の届く近い處が然うである。

水の底を搜したら、渠がためにこがれ死をしたと  
言ふ、久能谷の庵室の客も、其處に健在であらうも  
知れぬ。

否、健在ならばと云ふ心で、君と其みるめおひせ  
ば四方の海の、水の底へも潜らうと、（ことづけ）  
をしたのであらう。

此の歌は、平安朝に艶名一世を壓した、田かりけ  
る童に襖をかりて、あをかりしより思ひそめてき、  
とあこがれた情に感じて、奥へと言ひて呼び入れけ  
るとなむ  
名嬢の作と思ふ。

言ふまでもないが、手帳に此をしるした人は、御

堂の柱に、うたゝ寐の歌を樂書したとおなじ玉脇の妻、みを子である。

深く考ふるまでもなく、庵の客と玉脇の妻との間には、不可思議の感應で、夢の契があつたらしい。

男は眞先に世間外に、はた世間のあるのを知つて、空想をして實現せしめむがために、身を以つて直ちに幽冥に趣いたものゝやうであるが、婦人は未だ半信半疑で居るのは、それとなく胸中の鬱悶を漏らした、未來があるものと定り、靈魂の行末が極つたら、直ぐにあとを追はうと言つた、言の端にも顯れて居た。

唯其有耶無耶であるために、男のあとを追ひもならず、生長らへる效もないので。

そゞろに門附を怪しんで、冥土の使のやうに感じた如きは幾分か心が亂れて居る。意氣張づくで死んで見せよように到つては、益々惱亂のほどが思ひ遣られる。

又一面から見れば、門附が談話の中に、神田邊の店で、江戸紫の夜あけがた、小僧が門を掃いて居る、納豆の聲がしたのは、其の人が生涯の東雲頃であつたかも知れぬ。――やがて暴風雨となつたが――

兎に角、（ことづけ）は何うならう。玉脇の妻は、以て未来の有無を占はうとしたらしかつたに――頭陀袋にも納めず、帯にもつけず、袂にも入れず、角兵衛が其の獅子頭の中に、封じて去つたのも氣懸りになる。爲替してきらめくものを掴ませて、のつつ反ツつの苦愚を見せない、上花主のために、商賣冥利、随一大切な處へ、偶然受取つて行つたのであらうけれども。

あれがもし、鳥にでも攫はれたら、思ふ人は虚空にあり、と信じて、夫人は羽化して飛ぶであらうか。いや、羊が食ふまでも、角兵衛は再び引返して其音信は傳へまい。

従つて砂を崩せば、従つて手にたまつた、色々の

貝殻かひがらにフト目を留とめて、

君きみとまたみる目めおひせば四方よもの海うみの

と我われにもあらず口くちずさんだ。

更さらに答こたへぬ。もし又またうつせ貝がひが、大おほいなる水みづの心こころを語かたり得えるなら、渚なぎさに敷しいた、いさゝ貝がひの花吹雪はなふぶきは、いつも私語さくやきを絶たえせぬたらうに。されば幼兒をさなこが拾ひろつても、われらが砂すなから掘ほり出だしても、這このものは同おなじ一いちである。

小貝こがひを其處そこで捨すてた。

而さうして横よこざまに砂すなに倒たふれた。腰こしの下したはずぐになだれたけれども、迂すべり落おちても埋うもれはせぬ。

しばらくして、其その半眼はんがんに閉とじた目は、斜なめに鳴なき鶴つるヶ岬さきまで線せんを引ひいて、其その半なかばと思おもふ點てんへひら／＼と燃もえ立たつやうな、不知火しらぬひにはつきり覺さめた。

とそれは獅子頭の緋の母衣であつた。

二人とも出て来た。濱は鳴鶴ヶ岬から、小坪の岨まで、人影一ツ見えぬ處へ。

停車場に演劇がある、町も村も引つぷるつて誰が角兵衛に取合はう。あはれ人の中のぼうふらのやうな忙しい稼業の兒たち、今日はおのづから閑なのである。

二人は此處でも後になり先になり、脚絆の足を入れ違ひに、頭を組んで白浪を被ぐばかり浪打際を歩行いたが、やがて其の大きい方は、五六尺渚を放れて、日影の如く散亂れた、かじめの中へ、草鞋を突出して休んだ。

小獅子は一層活發に、衝と浪を追ふ、颯と追はれる。其光景、ひとへに人の兒の戯れるやうには見えず、嘗て孤兒院の兒が此處に来て、一種の監督の下に、遊んだのを見たが、それとひとつで、浮世の浪に揉み立てられるかといぢらしい。

但其の頭の獅子が怒り狂つて、たけり戦ふ勢である。

勝では可い！

ト草鞋を脱いで、跣足になつて横歩行をしはじめた。あしを濡らして遊んで居る。

大きい方は仰向けに母衣を敷いて、膝を小さな山形に寝た。

磯を横ツ飛びの時は、其の草鞋を脱いだばかりであったが、やがて脚絆を取つて、膝まで入つて、静かに立つて居たと思ふと、引返して袴を脱いで、今度は衣類をまくつて腰までつかつて、二三度密と潮をはねたが、又ちよこ／＼と取つて返して、頭を刎退け、衣類を脱いで、丸裸になつて一文字に飛込んだ。陽氣はそれでも可かつたが、泳ぎは知らぬ兒と見える。唯勢よく、水を逆に刎返した。手でなぐつて、足で踏むを、海水は稻妻のやうに幼兒を包んで其の左右へ飛んだ。―― 雫ばかりの音もせず―― 獅子はひとへに嬰兒になつた、白光は頭を撫で、

緑波は胸を抱いた。何等の寵兒ぞ、天地の大きな盥で産湯を浴びるよ。

散策子はむくと起きて、ひそかに其の幸福を祝するのであつた。

あとで聞くと、小兒心にもあまりの嬉しさに、此一幅の春の海に對して、報恩の志であつたといふ。一旦出て、濱へ上つて、寝た獅子の肩の處へしゃがんで居たが、對手が起返ると、濡れた身體に、頭だけ取つて獅子を被いだ。

それから更に水に入つた。些と出過たと思ふほど、分けられた波の脚は、二線長く廣く尾を引いて、小獅子の姿は伊豆の岬に、ちよと小さな點になつた。

濱に居るのが胡坐かいたと思ふと、テン、テン、テンテンツ、テンテン波に丁と打込む太鼓、油のやうな海面へ、綾を流して、響くと同時に、水中に立つたのが、一曲、頭を倒に。

これに眩めいたものであらう、婀呀忌はし、よみ  
ぢの（ことづけ）を籠めたる獅子を、と見る  
内に、幼児は見えなくなつた。

未だ浮ばぬ。

太鼓が止んで、濱なるは棒立ちになつた。

砂山を慌しく一文字に駈けて、此方が近いた時、  
どうしたのか、脱ぎ捨てた袴、着物、脚絆、海草の  
乾びた状の、あらゆる記念と一緒に、太鼓も泥草鞋  
も一まとめに引かゝへて、大きな渠は、砂煙を上げ  
て町の方へ一散に遁げたのである。

浪はのたりと打つ。

八ヤ二三人駈けて來たが、いづれも高聲の大笑ひ、

「馬鹿な奴だ。」

「馬鹿野郎。」

ポクノと來た巡查に、散策子が、縋りつくやう

にして、一言いふと、

「角兵衛が、はゝゝ、然うぢやさうで。」

死骸は其の日終日見當らなかつたが、翌日しら／＼あけの引潮に、去年の夏、庵室の客が溺れたとおなじ鳴鶴ヶ岬の岩に上つた時は二人であつた。顔が玉のやうな乳房にくつついて、緋母衣がびつしより、其雪の腕にからんで、一人は美にして艶であつた。玉脇の妻は靈魂の行方が分つたのであらう。

然らば、といつて、土手の下で、分れ際に、やゝ遠ざかつて、見返つた時——其紫の深張を帯のあたりで横にして、少し打傾いて、黒髪の頭おもげに見送つて居た姿を忘れぬ。どんなに潮に亂れたらう。渚の砂は、崩しても、積る、くぼめば、たまる、音もせぬ。たゞ美しい骨が出る。貝の色は、日の紅、渚の雪、浪の緑。

【完】